

アラガミちゃんちゃん
猫ちゃんちゃん

偽馬鹿

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

猫、GOD EATERの世界に降臨！

縦横無尽に走り回り、大活躍するぞ！

※このSSはシリアス風味です

目次

吾輩は猫である	1	撫でまわすという話である。	99
名前はひとつだけある	26	しかし何ということもなかったから別段	
どこで生れたか見当がつかない	36	恐しいとも思わなかった	108
何もない所でニャーニャー鳴いていた	48	ただ彼女の掌に載せられてスーと持ち上げられた	123
ブラッドウイング	60	何だかフワフワした感じがあつた	134
私はこの世界で初めて人間を見た	69	掌の上で少し落ちついて少女の顔を見た	145
しかもそれは少女という純真無垢なそれであつた	81	この時妙なものだと思つた感じが今でも残っている	155
ブラッドウイング2	92	ブラッドウイングブラッド3	164
この少女というのは時々我々を捕まえて		第一顔がつるつるしてまるで水晶玉だ	

吾輩は猫である

朝起きたら猫でした。

「……………にゃん？」

唐突な話である。

そもそも何の前触れもなく猫になるなんて、あり得るのだろうか。
いやありえたからこんな状況なんだけど。

「にゃあ……………」

ここはどこだろうか。

自分の部屋ではない。

それどころか部屋ですらなかった。

というか廃墟だ。

ぎゅるるる。

お腹が鳴る。

ご飯食べたい。

何もない。

つらい。

どうしようか。

周囲には実のなりそうな木もない。

どこかに食べられそうなものが残ってたりしないだろうか。

周囲をうろろうろ。

壊れた戸棚、ボロボロのタンス。

見つかったのは缶詰が3つほど。

開けられるかどうか。

ざく。

……。

開いた！

思っていた以上にあっさり缶詰は開いた。

中身は何とツナ。

これ以上ないごちそうである。

猫的には。

……塩分とか大丈夫なんだろうか。

いや、この状況下で贅沢は言っていられない。

食べる。

美味しい！

もう一つ！

いや、駄目だわ。

正気に戻った。

そうそう、今は駄目だ。

お腹はまだまだ空いているが、流石に一気に食べるのはまずい。

いや美味しかったけど。

ひとまず残した缶は戸棚に放り込み、辺りを散策する。

まずは情報収集だ。

安全そうな場所も確保したいところ。

暫く歩き回った結果。

辺りに人間が暮らしているような場所はなく、ただの廃墟が広がるだけ。

しかしだ。

何だか見覚えがあるような気がする。

この壊れ方、どこかで見たような……。

しかし眠い。

やる気というかそう言った感じのものがあれなのだ。

ゆるつゆるなのだ。

なのでとても眠いのだった。

「にゃあ……ふ」

危険はなさそうだ。

とりあえず寝ておこう。

「わあ、猫さんだ」

気付くと、なんか掴まれて抱えられていた。

うむ。

完全に捕まった。

「ねえ、どうしてこんなところにいるの？ お母さんはいるの？」

猫の私に色々と聞いてくるお嬢さん。

なんだろうか。

嫌な予感がしないでもない。

「ねえ猫さん。おうちに来る？」

ほら、やつぱり。

この状況下で断ることはできない。

というか逃げられないのだから仕方がない。

「にゃあ」

「わあ……！」

喜ぶお嬢さん。

なんだか可愛い。

これは母性本能か。

いやまあこの身体は男なわけだが。

「わたしね、わたしね、名前はね、ツバサっていうの！」

「にゃあ！」

ツバサちゃんか。

私の名前は……まあ、どうでもいいか。

猫だし。

過去の自分にあんまり興味はないのだ。

忘れたい記憶でもある。

「えへへ……よろしくね！」

「にやあ！」

このまま連れて帰られるようだ。

まあいい。

別に困ることはない。

ただ残念なことが一つ。

あの残した缶詰を食べることができなかったことだ。

「にやん」

「えへへ。猫さん猫さん」

にやごにやごしていると、お嬢さんが凄い勢いで撫でてくる。

割と痛い。

だがまあ、我慢できないわけではない。

小さい子なのだ。

我慢してやるのが大人という奴だ。
しかし。

この子の親が見当たらない。
どうやら、いない様子だ。

仕方ない。

ここはお嬢さんを守る番猫として生きるしかないようだな。
可愛いだけではないということを教えなければなるまい。

「猫さん猫さん」

「にゃあ……」

「猫さんはいなくならないよね……?」

「なう」

いなくならないさ。

猫は気まぐれだが、私はきつと大丈夫だ。

元は人間だしな。

「にゃあ」

「クロ！ 今日だね、おつきなトウモロコシ貰ったんだよ！」

家猫になって暫く。

この世界はとて危険な環境にあることを知った。

アラガミという凶悪な怪物が現れた。

そのアラガミによって世界は混沌の渦へと飲まれた。

そんな世界だ。

つまり。

ここはG O D E A T E Rの世界だ。

「えへへ。クロ、美味しい？」

「にゃあ」

「よかったあ！」

笑顔のツバサ。

彼女の笑顔を絶やすわけにはいかない。

故に、私はずっと一緒にいる。

彼女を幸せにするために。

……一緒にいるだけだ。

私にできることは、それだけだ。

この身が人間であつたならば。

もしかししたら、などと思つた。

「クロー！ 今日だね、お散歩に行くよ！」

「いやあ」

「えへへ」

散歩と言つても、私は抱えられたままである。

そのままツバサが歩くだけなのだが……まあ、気の済むまで一緒にいよう。

どうせ猫は暇なのだ。

捕まつたままで歩くなどわけないのである。

「にゃ……」

しかし、どうにも嫌な予感が頭から離れない。

野生の直感とでもいうのだろうか。

何かがこちらを狙っているかのような気がしてならなかった。

「にゃああ」

「え、クロ!?!」

嫌な予感だ。

そしてそれは確信に至った。

心配がするのだ。

人ではない、普通の動物ではない息遣い。

それが、こちらに向かってきている。

私はツバサの腕を抜け出して走り出す。

とにかくここから離れなくてはならない。

危険が迫っている。

「クロ、待ってよお!」

「にゃああ」

少し速度を落とし、私はツバサの先導をする。

こちらは駄目だ。

最短ルートで人のいる場所に転がり込まなければ。

急ぐ。

だが、ツバサは足が遅い。

いや、こちらが速過ぎるだけか。

この差が今はもどかしい。

「待って、行かないで。クロー！」

振り返ると、ツバサは立ち止まっていた。

まずい。

あの位置からは匂いがする。

アラガミの匂いだ。

「いやあ！」

「え——」

駆け出し、飛び掛かる。

大きな口。

二足歩行。

人間並みのサイズ。

オウガテイルか？

今は考えている余裕はないが。

噛みつく。

しかしわかる。

噛みついた先から喰われている。

だが駄目だ。

離れてしまえば次の目標はツバサだ。

離れるわけにはいかなかった。

「クロッ！」

「しゃあなあ!!」

オウガテイルの目を塞ぐように飛びつく。

ギチギチと身体が喰われていく感覚に襲われる。

だが、それでも。

私はしがみついたままだった。

「にゃあー！」

逃げろと。

ああ、この猫の身体がもどかしい。

喋ることができない。

力もない。

ただこのまま喰われるのを待つだけだろう。

しかし。

それでも。

ツバサだけはどうか逃がさなくては。

「にゃあああああああ!!」

血が飛び散る。

力が抜けていく。

だが絶対に離さない。

ここから先に行かせるものか。

「クロ……い！」

駆けだす音がする。

そうだ、それでいい。

私なんか忘れてしまえ。

所詮小動物。

その辺で息絶えるだけの存在だ。

だがそれでも。

ツバサの命を救ったことだけは誇っても良いかもしれない。

……だが。

「クロー・逃げてー！」

何かがオウガテイルを叩く。

短い木材だ。

その辺に転がっていたものだろう。

それを使って、ツバサがオウガテイルを叩いているのだ。

駄目だ。

アラガミにそんなものは通じない。

分かっているはずだ。

それなのに、ツバサは逃げることはなかった。

「一緒にいるって……一緒にいるって決めたんだもん！」

その台詞に、私は心底嬉しくなってしまうた。

ああ、ツバサはこんな私と一緒にいてくれることを望んだのだ。だから助けようとしている。

だが、それでも。

アラガミには無力だ。

勝てないのだ。

「ざわり、と身体が震える。

喰われる感覚ではない。

むしろ逆だ。

私の身体がアラガミを喰っていた。

「いやああああああ!!!」

噛みついた。

全力をもつて、オウガテイルの瞳らしき場所をかみ砕いた。

するとどうだろう。

なんと、私の牙が通ったではないか。

「ふるるるるる」

これならば。

これならばツバサを救える。

助けることができるのだ。

「ぐるるるるるる」

さあ、よく分からないこの身体よ。
奮い立て。

力を出せ。

何とかしろ。

ツバサを助けるんだ。

「があああああ!!!」

死闘の末。

私はオウガテイルを退けた。

右前足は変な方向に曲がっていたし、右目は見えなくなっていた。尻尾など既になくなっていったし、お腹の辺りの感覚がない。

だが。

それでも。

私は守り抜くことができた。

ツバサは、生きている。

「……っ！」

しかしだ。

私はもう一緒にいることはできないだろう。

アラガミを倒せるのは同じアラガミか、ゴッドイーターだけだ。

私はゴッドイーターではない。

ならば私は……アラガミなのだろう。

「く、クロ……？」

歩き出す。

ひよこひよこ、ととても歩いていると言えないほど遅い速度でツバサから離れる。

私はアラガミなのだ。

人類の天敵。

そして世界の敵。

それがアラガミだ。

それに気付いてしまった以上、私はツバサと一緒にいることはできない。

できないのだ。

「どうして……？ どこ行くの……？」

だからそんな泣きそうな声を出さないで欲しい。

私はアラガミ、ツバサは人。

相容れない存在なのだ。

だから。

私は、ツバサから離れなくてはいけない。

約束を……守れない。

そんな男だ。

猫だが。

「待つてよ……行かないでよ……！」

だが、ツバサの足は動かない。

動けない。

何故かは何となくわかる。

きつとツバサの両親はアラガミに殺されたのだ。

この世界では珍しいことではない。

それ故に、アラガミである私を追いかけることができないのだ。

それでいい。

少なくとも、あの集落ではツバサはのけ者になっていたりしなかった。

それどころか、皆優しい人たちだ。

私を飼い始めたツバサの為に、食料を分けてくれさえした。

だから大丈夫だ。

ツバサは大丈夫だ。

後は、私が大丈夫になればいい。

「クロっ……い！」

振り向かない。

もう、きつと会うこともないだろう。

振り返ってしまえば、私は彼女から離れることができなくなってしまいかもしれない。

それは駄目だ。

ツバサの将来を閉ざしてしまうかもしれない。

だから。

「にゃあ」

さようなら、ツバサ。

ツバサと別れて、廃墟へと辿り着いた。

ツバサと会ってから一度も来ていなかったが、変わりはないようだ。

……いや、少し崩壊が進んでいるか。

まあそれは関係ない。

私は戸棚を調べ、隠してあった缶詰を取り出した。

絵柄はかすれていて見えなくなっていたが、前に食べた物と同じ缶詰だ。

きつと食料が入っているだろう。

爪でそれを開けようとして、ふと気付く。

そうだ、そんなことをする必要はないのだ。

アラガミは何でも食べる。

それ故に、缶詰も缶ごと食べることができるのだ。

ガリガリと、そのまま缶に噛みつく。

味がする。

美味しいと感じる。

金属の味、そして中の具材の味。

「……………」

ふと気付くと、何故か缶詰が濡れていた。

中身が漏れていたのかと思ったがそうではなかった。

涙だ。

私が泣いていたのだ。

動物は悲しくても涙を流すことはない。

必要がないからだ。

そんな機能、猫には存在していない。

「……」

ああ。

私はもう猫ですらないのだ。

涙は止まらない。

ぼたぼたと涙が落ちる音と私の咀嚼音だけが辺りに響く。

ああ、私も一緒にいたかった。

もし可能であれば、ずっと一緒にいてやりたかった。

そうでなくても、彼女のために命を投げ出すことが惜しくないくらいに、彼女が大切になっていった。

だかもう会えない。
会ってはいけない。

アラガミと一緒にいる存在など、世界が許すとは思えない。

だから離れた。

彼女の為だ。

そう思ってた。

しかしだ。

もしかしたら私は。

彼女を守り抜く自信がなかったのかもしれない。

世界を敵に回してでも、彼女を守る覚悟がなかったのかもしれない。

「……」

今更そんなことに気付くなんて。

愚かな猫……いや、アラガミだ。

「じゃあ」

鳴き声が響く。

今更猫の鳴き声など、あげてどうするのか。

「にゃあ」

だが駄目だ。

もう止まらない。

「にゃあ……!」

涙も止まる事がない。

もう自分にもどうにもできなかつた。

「にゃああああああああ

!!!!!!!

」

悲しい。

辛い。

寂しい。

助けて。

会いたい。

あの笑顔が愛おしい。

あの手の平が懐かしい。

あの子の全てが……大好きだった。

鳴いて泣いて啼いて。

声も涙も枯れ果てて。

私は気付いたら眠っていたのだった。

名前はひとつだけある

目が覚めた私は、手あたり次第にその場にあるものを食べ始めた。
アラガミは食べる。

そして身体を変化させていく。

本当は身体を構成するアラガミ細胞を変化させているのだろうが、些細な違いだ。

とにかく、私には力がない。

オウガテイルにすら辛勝だ。

そんな状況で生きていけるほど、この世界は甘くない。

「……」

そこで、ふと考える。

今の私に生きている価値などあるのだろうか。

先程まで存在していた目的、目標もなくなった私が、生きていいのだろうか。

……そこまで考えて、ひとまず思考を遮断した。

生きている価値とかそういうのを考えるほど、私はセンチメンタルだったのか。そう思つて頭を振り、思考を散らす。今は生きることだけを考えるのだ。

さて。

傷は塞がったが、私の身体は未だに猫だ。

とにかく強くならなくてはならない。

ガジリガジリと金属片を食べながら、私は次の獲物を探していた。

味は度外視。

お腹は減り続けている。

食べ続けることに問題はなさそうだ。

「……………」

ふと、何かの物音がした。

小さなものだ。

人間のサイズではない。

まるで小動物のよう。

「……」

仕方ない。

私は食べていた金属片をその辺に投げ出し、物音がする場所へと向かった。

「くう……くうん」

犬だ。

子犬が一匹、その場に転がっていた。

その近くには母親だろうか、痩せに痩せて、餓死してしまったであろう死体があった。

「くうん、くうん」

子犬は鳴いていた。

否、泣いていた。

親が動かないのだ。

もう、動かないのだ。

それに気付いてしまったのだろうか。

しかし、それでも。

離れることはできなかったのだろう。

それはきつと生きることができないからではなく。

ただ単純に、親と離れたくないからだろう。

「……にゃん」

「！ぐるぐるー！」

私が鳴くと、子犬は即座に起き上がり、私に対して威嚇をする。

……もう動かない親を庇って。

ああ駄目だ。

もう駄目だった。

私はその姿にツバサを幻視してしまった。

放っておくことなどできない。

私は少しだけその場を離れ、食べ残していた缶を口に啜えて子犬へと近づいた。

子犬は警戒を解かないが、缶詰を爪で開けたところでその警戒が少し解けた。

食べられるものだど気付いたのだろう。

「……」

「……」

無言のまま暫く。

その場を私が離れると、子犬は警戒しながらもその缶詰の中身を食べ始めた。

さて。

この状況をどうする。

このままでは子犬は死ぬだろう。

一度助けた命だが、それもいいだろう。

私は何でも食べることができるのだ。

その内の、子犬が食べられる食料を与えただけに過ぎない。

しかしだ。

最早私には子犬を見捨てることはできなかつた。

だってそうだろう。

あの子犬を見て、私はツバサを思い出してしまったのだから。

「わん！」

缶の中身を食べきったところで、私は子犬の近くに戻つた。

すると、子犬は命の恩人だと気付いたようで、私に懐いてくれた。

私が動くとその後ろについて回るようになったのだ。

なるほど、頭がいい。

しかし、どうしても。

子犬はこの廃墟の一角から出ようとはしなかった。

ああ、理由は分かっている。

子犬の親だ。

親がこの場にいるのだ。

恐らく子犬も気付いているのだろう。

だが、離れることなどできるだろうか。

自分の身を削り、生かしてくれた親から、離れることができるだろうか。

私には無理だ。

なので私は、子犬の親を背中に乗せてその場を移動することにした。

廃墟はとにかく食料がない。

偶然手に入れた缶詰も、あれ以外には見当たらなかった。

ならば、新しい住処を探さなければならないだろう。

幸い、子犬の親の身体は小さかった。

私の背中に乗せて運ぶのに支障はない。

「わん」

子犬は私が親を運んでいることに気付いたのか、尻尾を振りながら私の後ろをついてきた。

賢い子だ。

……さて。

この子が食べることのできる食料は、どこにあるのだろうか。

「わん！」

「わーかわいいー！」

最終手段、集落である。

正直な話、あの近辺で食料が存在するであろう場所はここしか見当がつかなかったの
である。

しかし、子犬はまだ小さい。

故に子供にはうけがいい。

「はっはっはっ」

子犬もそのことに気付いた様子で、くるくると子供たちの周りを回る。

その様子を見て、飼いたいと思う人間は数多くいるだろう。

そうだ、ここで暮らせばいい。

私はアラガミだが、あの子は別だ。

きつと幸せになるだろう。

子犬の親を乗せた私は、集落から離れてちよつとだけ高い丘に立っていた。

そこに、この犬の墓を作るのである。

いや、墓と言えるかどうかすら怪しい、ただ埋めるだけの作業だ。

……あの子犬はきつと、私を許さないだろう。

しかし、それでいい。

あの子はここで幸せになればいいのだ。

それに、例え恨まれたところで、痛くもかゆくもない。

精々噛みつかれるだけだろう。

私はアラガミだ。

その程度で傷などつかない。

「わん！」

その場から去ろうとした時、背後から子犬の鳴き声でした。
まさかだ。

あれだけ構われていた子犬が、人間を振り切ってここまで来るのか。
驚いていると、子犬は墓の前で寝転がり小さく鳴いた。

そして、私の方を見て、頭を下げた……ように見えた。

それだけだ。

見えただけ。

その直後に、子犬は集落の方へと駆けて行った。

「じゃあ」

勝手に鳴き声が出る。

まあいい。

私の旅に連れ合いは必要ない。

元々、子犬はここに置いていくつもりだったのだ。
寂しくなど、ない。

少し、最後まで見てやれないことに、罪悪感はあるが。

さて。

私は独りで旅に出る。

今度は独りで遠くまで。

帰ってくる予定はない。

強くなって強くなって、とても強くなれば。

もしかしたら。

もしかしたら彼女を守る為に戦えるかもしれない。

そんな幻想を思い描いて、私は新しい一步を踏み出すのだった。

どこで生れたか見当がつかない

そうして暫く。

私はたくさんの物を食べた。

不思議なものだ。

食べると力が湧くというか、そんな気持ちになるのだ。

空腹感が満たされることはないが、それでもだ。

しかし、姿形は猫のまま。

非力で、すばしっこいだけの猫だった。

……ひとつ思いついたことはある。

アラガミを食べることだ。

共食いを行うことで、直接オラクル細胞を身体に取り込むのだ。

そうすることで、きつと身体は強くなるはずだ。

専門家ではないので、多分、きつとという接頭語が付くのは勘弁してほしい。

「あ……が……」

そうして、暫く弱っていて私でも勝てそうなアラガミを探していると、今にも事切れそうな男が一人。

ええ……またかあ……という思い。

この間も子犬を拾ったではないか。

また拾うのか、私は。

いやまあ放っておくわけにもいかないのだが。

見れば、巨大な腕輪を嵌めている。

つまるところ、この男はゴッドイーターだ。

名前は分からない。

見た記憶もない。

きつとモブの一人だろう。

「にゃあ」

「なん……だ……？　猫……か……？」

猫である。

アラガミキヤットとでも呼んでくれ。

傷口を見る。

がつつり背中を開かれてしまっている。

痛そうだ。

いやまあ私も似たような傷を負ったことはあるが。

私は少しだけ寄り道をして薬を拾ってきて、男の目の前に置いた。

回復薬だ。

ゴッドイーターが服用する特殊な薬品である。

それは体内のオラクル細胞を活性化させて傷を癒す……という感じの薬品のはずだ。多分。

男はそれを手に取り、即座に飲み干す。

背中への傷が凄く勢いでなくなっていく。

凄く効き目だ。

「猫……だよな……？」

「にゃあ」

少し落ち着いた男が私を見て呟く。

そう、猫だ。

ただしアラガミだ。

そのくせ人間の精神まで持っている。

ややこしい。

男は怪我を癒した。

最早アラガミは近くにいない。

男は助かったのだ。

用は済んだ。

「ありがとう、助かったよ」

「にゃあ」

猫にお礼を言う男。

律儀な奴だ。

だが悪くない。

色々と世話したくなるシヨタ顔だ。

いやまあ、私はシヨタコンではないのだが。

「にゃ」

もしかしたら戦死扱いになっているかもしれない。

男はまだまだピンチだろう。

「……駄目か。通信機がいかれてる」

ピンチだった。

ここは最後まで面倒を見なければならぬ。

私は男の前で振り向き、とことこと歩き始めた。

ついてこいという意味表示だ。

その気持ちを通じたのか、男は辛そうな足取りではあるが、ついてきてくれた。

「にゃあ」

ぱしりと、猫の手で戸棚を叩いて開く。

すると、中にはスタングレネードがいくつか。

ゴツドイーターたちの落とし物である。

「……これだけあれば、極東支部に戻れるかもしれない」

それは何より。

しかし猫は心配だ。

急にアラガミの群れが襲い掛かってくるかもしれない。

そうならば、男は餌だ。

いやまあ私も餌なんだが。

しかし、そうなったら折角の回復薬、そしてスタングレネードを与えた意味がない。そうなれば、極東支部に辿り着くまで一緒に行くしかないだろう。

剣を杖替わりに歩き始めた男の横に並び、とことこと歩き始める私。ついて行つてやるといふ気持ちを出してみた。

「はは、君がいれば何とかかなりそうだ」

男は辛そうな顔を無理矢理笑顔に変えて、そのまま歩き続ける。

無理する必要はないのだが……。

いや、先程の傷はかなり深かった。

無理をしなければ動けないのかもしれない。

「にゃあ」

アラガミの気配のないルートを探しながら、私は男を先導した。

中々に骨の折れる作業だ。

何故ならお腹が空く。

アラガミだからだ。

猫だ。

男の調子も良くなってきたようで、剣を杖替わりにしなくてもよくなったようだ。普通に歩いてる。

これならばまあ、ある程度は戦ってくれるだろう。

私は困くらいにしかねないので頑張ってくれ。

そうして暫く歩いて進んだ。

男は完全に調子を取り戻し、時折笑顔も見せるようになった。

いい傾向だ。

猫的にはもう放り出しても問題なさそうな気配すら感じていた。

まあ、最後まで面倒は見るが。

「じゃあー」

それから更に歩いた私達は、無事極東支部へと辿り着いた。

男は安堵からか座り込み、その場で倒れ込んだ。

死んだわけではない。

一瞬焦ったが。

まあいい。

これではお役御免だ。

そそくさと立ち去ることにしよう。

「あ、待って！」

待たないのだ。

猫は忙しいのである。

びよんびよんびよんと崖を登っていき、そのまま平原の方へと走っていく。

個人的なミツシヨン、クリアである。

「いやいや」

そうしていくらか経過すると、何やらゴツドイーターたちを引っ張り出して何かをしている様子が見受けられた。

みな口々に猫を呼び、探しているようだ。

うんまあ、私を探しますねあれは。

どういう理由で探しているかは大体想像はつくが、まあ捕まるわけにもいかない。

その理由は、やはり私がアラガミだからだ。

ただの猫だったらさつさと出ていくのだが。

……いや、ただの猫だったらツバサを守れなかった。

だからこれでいいのだ。

割と動員数が多いので、逃げるのも大変だ。

もうそろそろ別の区域に移るべきだろうかと考え始めた頃。

私はとある事件に巻き込まれるのだった。

「にゃあ!？」

強烈な爆発音。

それが響き渡ったのは私が廃墟でぐっすりと眠っていた時だった。

最初は何が何だかわからなかったが、目を覚まして伸びてから気付く。

ああ、これはゴツドイーターが放つ砲撃だ。

しかもかなり適応率が高い奴だ。

ゴツドイーターの様子を観察していて気付いたことだ。

ゴツドイーターと神機の適合率が高いと、なんとというか神機が喜んでいるような気配をさせるのだ。

ただ何となくそう感じるだけなので、確証があるわけではないが。

それはともかく。

かなりの適合率を持ったゴッドイーターの砲撃が、何故か廃墟を攻撃していた様子。違和感を感じるが、それはどうでもいい。

今はそう、この状況から逃げるのが先決だ。

「ぐるぐるぐる……」

複数の大型アラガミ。

プリティヴィ・マータだ。

どうしてそんな名前を正確に覚えているのか。

かなりの疑問を抱いたが、本当にそれどころではなかった。

真面目な話、死ぬ。

これ以上ないくらいにピンチだ。

こんな状況、逃げるに限る。

瓦礫の隙間をすすると抜けて、外へと身体を投げ出す。

周囲にゴッドイーターがいるが、まあアラガミの中に飛び込むよりましだろう。

「え？」

そして、私は見事にゴッドイーターの一人の頭に飛び乗ることに成功した。
首が痛そうだ。

だがまあ我慢して欲しい。

所詮猫の体重だ。

「猫がこんなところに……！」

女性が二人、男が三人。

いや、瓦礫の向こうにもう一人いる。

しかし、構っている余裕はなかった。

私はプリティヴィ・マータ同士の隙間を全力で駆けだした。

囿である。

それに気付いたのか、男の一人が私に意識を向けた。プリティヴィ・マータに重い一撃を喰らわせた。

「ここは引くぞ。」

そりゃそうだ。

ゴッドイーターの数が少なすぎる。

プリティヴィ・マータ相手なら、一体に対して四人は欲しい。

ここにはぎつと三体はいるのだ。
逃げるしかない。

「にやああああー！」

私はプリティヴィ・マータの周りを全力で走る。

その隙にゴッドイーター達が突いて逃げることを期待してだ。

あとついでに混乱に乗じて一緒に逃げたい。

「はあー！」

……なんか見たことのある男が、プリティヴィ・マータの顔面にナイフ系の神機を叩き込んだ。

その隙に逃げ出すゴッドイーターのみんな。

どうやら無事に逃げ切れそうだ。

「にやあー！」

「今度は逃がさないよ」

……どうやら、ゴッドイーター達からは逃げられそうにないようだ。

何も無い所でニャーニャー鳴いていた

「ふむふむ、なるほど。興味深いね」

「にゃああ……」

「おつとごめんよ。ほら、猫缶だよ」

「なあ？」

そんなもので懐柔されると思うな美味しい。

懐柔されてやろう。

猫は寛大だからな。

ここは極東支部のラボラトリだ。

そこにいるペイラー紳によって、私は隅から隅まで調べ上げられているのだった。

「……猫、いるのね。こんな時代に」

「ごろごろろろ」

私を撫でているのは橘サクヤ。

よくもまあこのような恰好で戦場を駆け抜けるものだ。

「猫かあ……ペットって奴だっけ？」

「ふにゃ……」

私のひげを引っ張ってくるのは藤木コウタ。

若干痛いけど、まあ我慢してやろう。

それくらいに気分はいい。

猫缶美味い。

そんな様子を遠巻きに見ているのがソーマ・シックザールだ。

猫には興味ないか、そうか。

多分犬派だろうなという気はする。

そして。

私が助けたゴツドイーターもいた。

神薙ユウだ。

まさかの主人公っぽい。

「やあ」

と言って手を握ってくる。

仕方ない、ふみふみしてやろう。

「——解析終わったよ」

ふみふみしていると、ペイラー榊が作業を終えたようだ。

それと同時に、私は桶サクヤの膝から飛び降りる。

名残惜しいが、まあそうしたほうがいいだろう。

多分。

「簡単に言うとは……この子、アラガミだねえ」

「え？」

その台詞と同時に、皆が一斉に距離をとる。

ソーマ・シツクザールだけは驚きで瞳を揺らしたただけだったが。

「アラガミ？　これが？」

「んみやふ」

その辺に転がる私。

敵意はないと表現しているのだが、伝わるだろうか。

まあこの状況だ。

煮るなり焼くなり好きにするといひ。

「敵対意思は感じられないね。さつき猫缶食べたし」

「そんな理由……?」

「だってそうじゃないか。彼は人間を食べようとしていない」

ペイラー榊は断じる。

「そうだ私は人間を食べていない。」

「食べる気分にならないのである。」

「これは偏食因子が原因だろうか。いやはや、実に興味深い」

「そう言いながら顔面を近づけてくるペイラー榊。」

「なんだよこの人無敵かよ。」

「一応私はアラガミなんだぞ。」

「ペしペしと眼鏡を叩いて主張する私。」

「ほらね? 人間を食べる気なら既に食べられているだろう」

「自分で試すとか正気かよこの人」

「科学者なんてね、正気でできるものではないよ」

「それはそう。」

「とまあそういった話はともかく。」

「私はごろんと転がって眠る姿勢に入る。」

どうせこの人数が相手では逃げることもできない。
人数が減つてからチャンスを待つのだ。

「そういえば」

暫くして、ペイラー榼と二人きりになったときだ。

彼が声をかけてきた。

「君には名前があるのかな？」

返事は期待してなかったのだろう。

独り言のようなそれに、私は応えることにした。

ガリガリと爪を立てて壁に傷をつける。

「おおっと機械を傷つけるのは……おや。クロ？ 君の名前はクロでいいのかい？」

「にゃあ」

慌てて様子を見に来たペイラー榼に対して返事をした。

これは大事な名前だ。

そして、名前を付けてくれたツバサの為にも、他の名前は受け入れられないのだ。

「なるほどなるほど。君は人の言葉も理解できるんだね」

「にゃあふ」

名前の話になれば仕方がない。

人の言葉を理解していると分かれば何をされるか分からないが……まあいい。
何かできるわけでもない。

だがそれでも。

やりたいと思うことはある。

ガリガリと、更に爪で壁を削る。

「つよくなりたい……か」

そうだ。

強くなりたいのだ。

これから先、何があるか分からない。

何かあつてからでは遅い。

「じゃあ、ふ」

そして。

また彼女の前に立つ時には、この世界の何よりも強くなっていたい。

今度こそ、彼女を全てから守るのだ。

「そうだね……こっちのお仕事に協力してくれるのであれば……君に協力するのは構わないよ」

「……にゃあ」

それは、選択肢などないに等しい。

ペイラー櫛は私に手を差し出していた。

その手に、私は右前足を差し出すのだった。

翌日から、私の食事はアラガミの素材を混ぜ込んだ猫缶になった。

猫缶である必要はないのだが、まあ他の人にバレないように細工をしているのかもしれない。

そしてラボラトリには猫用のアスレチック的な物が設置された。

ぴよんぴよんと跳ね回る私。

それらのアスレチックに乗るたびに、何やら電波が飛んでいるらしく、計測器がカタカタと動く。

なるほど、身体能力の変化辺りを調べているのか。

アラガミの成長を直で調べるなど、ほぼほぼ不可能だからな。

まあそんなこんなで実験動物として使われつつ、オラクル細胞を摂取し続ける私。さて、これから先どうなっていくのか。

それはともかく。

「ねっ……猫……」

「うわ……かわいい……なんだあれ……」

「これは……ほう……」

最近、ラボラトリに来る人多くない？

ちらりとペイラー榺を見ると私を指差す。

なるほど、見世物か。

「にゃあふ」

まあ、問題はない。

精々私の猫缶の為にもたくさん来るんだな。

ペイラー榺が色々やってるし。

カタカタ機材を動かしているパイラー櫛を見ながら、アスレチックの上で寝転がる私。

あまり反応するのにもまずい。

誰かに私の知性を感じ取られる可能性がある。

いやまあ、そんな奴一人くらいしか思い至らないが。

……まあいいか。

とりあえず寝る。

寝て、英気を養うことにしよう。

そして暫く経つと。

「え……猫？ え？」

「……にゃあ」

アリサ・イリーニチナ・アミエーラのセラピー猫の任務に就くことになった。

「あわわ……。小さい。ふわふわしてる。かわいい」

全身をもみくちゃにされながらも、まんざらではない私。

まあ、褒められているからな。

これで罵倒だったら暴れていたかもしれないが。

「クロっていうんだって」

「クロちゃん……」

撫でる速度が上がる。

うむ、先程の方が丁度いいぞ。

今の速度はちよつと早い。

アリサ・イリーニチナ・アミエーラ……長いな。

アリサ、その手をゆつくりと下ろすんだ。

ペしペしと軽く叩くと、私の抗議に気付いたのか撫でる速度を緩めてくれた。

そう、それでいい。

そのままゆつくり撫でていてくれ。

「ところで、猫がどうしてこんなところに？ フェンリル支部の内部に入り込める猫なんて……」

もつともな疑問を口にするアリサ。

そうか、一緒にあの地獄を脱出したのを忘れてしまったか。
無理もないが。

「ああ、クロはアラガミなんだ」

「え？」

「ぎゃん！」

そこに、神薙ユウが爆弾を投下する。

当然撫でられていた私にダメージが来る。

痛い。

撫でられていた頭が変な方向に曲がった。

「ああつごめんなさい！」

「ふしやー！」

「うわあ！　なんで俺に!?!」

そのまま落ちた私は、声を上げて神薙ユウに飛び掛かった。

なんでもか、原因を作った奴に突っ込むのは当然である。
ぎやりぎやりぎやり、と顔に爪の後をつけた。

そんな大変面白い出来事があつて。

アリサは爪で×印が作られた神薙ユウの顔を見て、笑っていた。

ブラッドウイング

番外編 ブラッドウイング

とある場所に、少女は力を手に入れるために全てを捨ててやってきた。

強くなるんだもつともつと。

弱かったから、私は友達を失ったんだ。

そう思い、その後悔した彼女は、ゴッドイーターになるために、フライアという移動要塞に足を運んだのである。

「気を楽しにして……その方がいい結果が出るわ」

このフライアの実質的管理者であるラケル。

その声が、少女の頭の中をよぎる。

少女は声を聴いていたものの、それどころではなかった。

ゴッドイーターになることができる。

やつと、やつとだ。

かつては年齢や適合する因子が存在しないとして放り出されたが、漸くゴッドイーターになれる機会が巡ってきた。

失敗はしない。

してはいけない。

それは最早死である。

少女はじつと自身の手の先にある神機を見る。

あれが、ゴッドイーターとして戦う私の力。

そう、力なのだ。

少女には力が必要だった。

それは友達を助けるためだ。

それは友達を守る為だ。

きつとどこかで苦しんでいる、友達を救うためだ。

そして。

意を決した彼女の腕に、上空から機械が落ちる。

ぞわりと、彼女の腕に何かが潜り込んできた。

「が……あああああああつ!!!」

激痛。

叫ぶことしかできない。

それほどまでの激痛が、彼女を襲った。

痛い、痛い痛い痛い痛い痛い——！

涙は流れ、声は枯れ、全身の筋肉が痙攣する。

それでも激痛は収まらない。

どうしてこんなことをしているんだろう。

少女は激痛の余りそんなことを考えていた。

ただの逃避だ。

それこそ、痛みから逃げるために勝手に起きた思考のずれである。

——だが。

「にゃあ」

記憶の中にあつたその小さな鳴き声が、彼女を覚醒させた。

「が……ぐ、う……ああああああ!!」

腕が痛い。

構うものか。

身体が動かない。

構うものか。

そんなの、あの時のクロに比べたら天と地の差だ……！

周囲では暴走しているとかなんとか言っているが、少女はそれどころではない。

右腕で神機を握り、左手で神機を掴んだ。

血がしたたり落ちる。

それどころではない。

「わ……たしの力の……アラガミの分際で……！」

ギリギリと左手の力が強くなる。

バキバキと骨の碎ける音がする。

構うものか。

少女はそんなことどうでもよかった。

「私に……逆らうんじゃあない!!!」

叫んだ。

それと同時に、神機が真つ二つに千切れ飛んだ。

「はあ……はあ……はあ……はあ……!」

「……」

「……」

少女を見ていた二人は無言だった。

少女の腕を噛み、アラガミにするのではと思われていた神機が、まさか真つ二つになるとは思っても見なかったからだ。

「凄い……何かしら。執着するものがあつたのね」

ラケルはそう一言呟くと、そつと目を伏せた。

「おめでとう。あなたは選ばれしゴッドイーター……ブラッドの一員となりました」
なんてことはない。

神機に適合して、従えたのだ。

少女は、ゴッドイーターになったのである。

「その力を……世界を救うために、皆の為に使ってくださいね」

ニコリと、ラケルは少女に笑いかけるのだった。

——だが。

「……嫌よ」

少女は反抗した。

そう、嫌なのだ。

少女はそのお願いが嫌だった。

だってそんなのおかしいじゃないか。

私の為に誰かがしてくれたことはある。

誰かのためにしたことも確かにある。

しかし。

しかしだ。

私の為に全てを投げ出した友達がいるのだ。

その大切な友達を放っておいて、自分だけみんなのために頑張る？

ありえない。

ふざけている。

半分になった神機が変形する。

歪なプレデターフォームだ。

それが、床に転がっているもう半分の神機に噛みついた。

ガリガリと機械の碎ける音がする。

ギイギイとアラガミの悲鳴がする。

そして一瞬の後、神機が更に変形した。

——翼だ。

深紅の翼。

それが彼女の腕から伸びていた。

「勿論、仕事はするよ」

ザクリと、翼を地面に突き立てて宣言する。

その顔は憤怒。

激情にかられた鬼の形相だ。

「だけど……私の全てはクロのもの。一片たりともあげないよ」

かつて、小さな小さな猫に救われた彼女——ツバサはゴッドイーターに。

そして後にブラッドウィングと呼ばれるようになる。

血の力。

感応の力。

そして、その意志の力。

ツバサはその胸に大切な友達との思い出を抱いて戦うのだ。

—— 例え、世界が敵になったとしても。

私はこの世界で初めて人間を見た

「にゃあん」

この日から、私はアリサの頭の上や膝の上に乗りながらセラピー猫として活躍している。

流石ゴツドイーター。

私に乗った程度ではびくともしない。

「ああつ駄目ですよクロ！ そこに乗ったら日記が……！」
カタタタン。

見事なステップで日記をぐちゃぐちゃにする。

「あああもう……ふふつ」

でも笑って許してくれる。

初期のアリサでは考えられないくらい柔らかくなった。

これが本来のアリサなのだろう。

いい子だ……。

まあツバサの方がいい子だったが！

それはともかく。

神薙ユウと一緒にリハビリをしているアリサ。

そしてその間にも、雨宮リンドウの行方を捜索している。

何か腕輪にはビーコンが付けられていて、居場所を把握できるのだとか。

「……？」

……ちよつと前に死にかけていた奴がそこにいるんだが。

まあいいか。

とにかく、私も色々やりたいことがあるわけで。

時々アナグラを抜け出して外へと出ていく。

今日はオウガテイルと戦う予定だ。

とはいえその辺に都合よくオウガテイルがいるわけではない。

わけではないが、この身体は特別性。

アラガミの種類くらいなら嗅ぎ分けられるのである。

「ふんふん……」

匂いを探つてオウガテイルを探す。

すると、都合よく一匹がはぐれているようだ。

早速狩りの時間である。

「にゃあああああああー」

「!!」

奇襲の一撃。

頭上から、脳天へと叩き込まれる爪による攻撃。

それが直撃することで、オウガテイルは若干ふらつく。

そのまま跳ねるように宙を舞い、着地と同時に疾走。

足に牙を立てる。

そのまま食いちぎり、速度を上げて通り過ぎる。

かつては噛みつくだけで精一杯だったが、最近になって細い部位を噛みちぎるくらいならできるようになった。

繊維結合が強くなったのだろうか。

いい変化だ。

そのまま転がっているオウガテイルに対して、何度も何度も爪を立てる。

決定打がないせいで遊んでいるようにも見えてしまうかもしれないが、こちらは本気である。

本気で倒すつもりで攻撃しているのである。

「なあー！……はぐはぐ」

暫く攻撃を続けて動かなくなるところで、捕喰タイムである。

オラクル細胞は早くしないと空中に飛んで行ってしまうので、ガツガツ掘り進めてコアを探す。

今日はちゃんと発見した。

そのコアをガブリと噛んで、そのまま飲み込む。

これでパワーアップだ。

中々良い感じに狩りができたと思う。

真夜中の、誰もが寝静まった時間帯。

私のような形の動物はほぼ存在しない世界の中で、私は生きている。生きている実感がある。

しかしだ。

どうにも先程から誰かに見られているような感覚がある。

振り向いても誰もいない。

辺りの匂いを探ってもそれらしい気配はない。

……いや、逆だ。

気配が強過ぎて感じる事ができないのだ。

「なあああああああ!!!」

叫ぶ。

ただ大きな声を出したわけではない。

音波振動を捉えるために叫んだのである。

それにより、背後の物陰に違和感を感じ取ることができた。

アラガミの感覚を司る部分が良く働いてくれた。

敵か味方か。

あるいはただの観測者か。

いやまあ何でも構わない。

私にできることはただ一つ。

それから全力で、迅速に逃げることであった。

「にゃああああ……」

全力でアナグラに駆け込んだ私は、急いで寢床に潜り込む。

戦わないのか、だって？

いや無理無理。

性能が違い過ぎる。

第一にこちらが相手の気配を感じ取れないということとは、そいつと私の次元がかけ離れているからである。

この場合、私は最弱クラスのアラガミであるオウガテイルを観測できていることから、相手がその逆である高次元の存在であると当たりを付けたわけだ。

そりゃ逃げる。

逃げるしかない。

気まぐれに殺されなかっただけありがたい。

しかし、最近漸くオウガテイルを楽に倒せるようになってきたのだ。

そろそろもう一段階上のステップに挑んでもいいのではないだろうか。

シユウ……いや、コンゴウか。

というわけで実戦へ。

強くなるためにはやはりアラガミのオラクル細胞を摂取するのが一番早いのだ、多分だが。

実際私の身体の質量が増えているという結果が出ている。

まあ私が他のところからアラガミを喰べているため、内容に齟齬が出てしまうのだが勘弁してほしい。

早く強くなりたいのだ。

「!!」

「こやぎ……」

現在、戦闘中。

コンゴウの顔面に噛みつき、ガリガリと爪を喰い込ませていく。
相手の腕のリーチ的に私には届かない。

勝った。

食べた。

強くなった。

これの繰り返しだ。

私は少しずつ、少しずつ強くなる。

そしていつの日か……なんて甘い考えだろうか。

とはいえ私には強くなるという選択肢しか存在していないわけで。

地道な努力ではあるが、これを続けるしかないのだ。

続けた先に何があるのかは分からないが。

……いや、考えたくないだけかもしれないが。

はぐはぐと猫缶を食べながら考えていると、急に全身を抱きしめられた。

ぎゅーだ。

痛くはないが、驚いた。

「クロ！ 今日は何、ちゃんと任務こなせたんだよっ」
何だか最近上機嫌なアリサ。

なるほど、聞くところによるとこれまでできなかつたことができるようになったことが気持ちの向上につながっている様子。

それは良い傾向だ。

ごろごろとよかつたねーという感じを醸し出す。

可愛い笑顔である。

まあツバサの方が可愛いけどな。

いや、これは鼻貞目か。

それはともかく。

うんまあ、情が湧くよね。

これだけ無防備な姿を見せられたら、誰だつてそうなる。

私もまんざらではない。

とはいえ私の本来の目的としては、強くなることだ。

そして、ツバサを他のどんなものからも護れるような存在になることだ。

……本当に、そんなものになれるかは怪しいが。

アラガミにおける上位種は感応種辺りだろうか。

そうなれば、私にもある程度の力が手に入るのだろうか。

猫の分際で。

ツバサを守り切れなかったこの私にも。

……まあいい。

ひとまず中型種の内の一匹、コンゴウとの闘いは完勝できたのだ。

まずは自分を褒めてもいいだろう。

「ふん、ふん、ふん……」

随分と機嫌がいいアリサ。

どうやら、神薙ユウに褒められたのが嬉しいらしい。

やはり子供だ。

大人である私が守ってやらなくてはいけないのではないだろうか。

……そのための力はないのだが。

力力力。

私の進もうとする先にはいつも力が付きまとう。
どうにかして、一足跳びに力を手に入れる手段はない物だろうか……？

……焦るな。

まだ私には時間がある。

この世界が終焉を迎えるのはまだ先だ。
危機を迎えるのは結構早いが。

……まずいな。

リンドウがいなくなり、その腕輪のビーコンで探査した結果、例のアラガミを発見する。

そして腕輪を使って情報を得た橘サクヤがエイジスに侵入するのだ。

いや、その前にシオを見つけるのが先だったか。

ああくそ、中途半端な知識で困る。

アラガミの名前なら簡単に出てくるというのに。

そう、例えば神機の種類だって簡単に……。

……待て。

そうか。

別に私の本体だけを強化する必要はないではないか。

外付けのパーツを強化するのも、強くなるための手段。

そう、私専用の神機を作ればいいのである。

……どうやって？

しかもそれは少女という純真無垢なそれであった

「おー……」

「にゃー……」

「おおー……」

「なあああ……」

暫く経ち、完全に立ち直ったアリサから離された。

アリサは名残惜しそうにしていたらしいが、まあ流石に完全復活したゴツドイーターに付きっ切りというわけにもいかない。

猫なのだが。

そして、そんな猫が新たに就いたお仕事が、シオの教育係である。

しかし……教育係とはいったい何をすればいいのか。

すいーっと放たれるオラクル弾を追いかけて、私は考える。

いや、身体が勝手に動くのだ。

猫の本能、仕方がない。

その様子を楽しそうに見ているシオ。

こら、あんまり無駄使いするとお腹が空きますよ。

まあそれをやめさせる方法がないわけだが。

コンコンと、ドアをノックする音。

力の入れ方からしてソーマだろう。

ドアが開くのを待って、ソーマが入るのと入れ替わりに外に出る。

猫にも聞かれたくない話だってあるはずだ。

そして、先日考えていた強化案だが、どうやらペイラー榊の方が強化案について考えてくれていたようだ。

非常に助かる。

強化案については4つあった。

一つは前足につける爪。

もう一つは口にはめる牙。

更に一つは背中に背負う砲台。

最後の一つは首輪から展開するチャクラムのようなもの。

個人的には全部乗せたいところだが、私と神機との相性が良いものが見つかるか、という問題があつた。

まあその辺りは考えてある。

実用化できるかは不安だが。

今のところ候補として考えているのはチャクラムだ。

何故なら、首輪であれば常時付けていても怪しまれにくいという点がある。

何に怪しまれるというのか、という意見もありそうだが、一応私は特殊なアラガミである。

怪しまれる可能性は排除したい。

というわけで、チャクラムの案に右足をバシンと叩きつけて意思を示す。

すると、即座に私と適合しそうな神機のコアをリストアップしてくれた。

仕事が早い。

とりあえず適当なものを見つけようと肉球で探していると……ふと、気になるコアを見つけた。

本来であれば何の変哲もないただのオウガテイルのコアだ。

しかし、その特筆事項に『目の辺りに傷があった』という文字。もしかしたら、私が初めて戦ったオウガテイルかもしれない。

私はふと思いついた。

このオウガテイルには、私のオラクル細胞が混ざり込んでいるのではないだろうか。

そう思い、こいつに肉球を当てて意思を示したのだった。

「ええつと、この子に神機を与える？ 正気？」

「科学者に正気を問うなんて」

「はいはい、科学者は正気じゃ務まらない、でしたっけ？」

「にやあ」

謎の会話。

そして謎の器具。

その器具に固定された私。

うむ、何か嫌な予感するね。

首が固定されているので、ぐいぐいと動かして声の聞こえる方を見ると、割と頻繁に

顔を見る少女の姿。

確かりツカちやんである。

そのリツカちやんとペイラー榊が言い合いをしながら機械を動かしているのだ。
うーん不穩。

「じゃあ始めるよクロ。痛いかもしれないけど、頑張つてね」

「うわ、本当にやるんだ」

「そうとも。これは彼がやりたいと言ったことだしね」

「……猫って喋つたっけ？」

がしやこん。

あ、待つてちよつと心の準備が。

「はいスタート」

「ぎにやああああああ!?!」

そんなコントを経て、私は神機を手に入れた。

鬼車……それが私の神機の名前だ。

くるくると首の周りを回転させたり、飛ばして追いかけてキャッチしたり。壁にぶつけてバウンドしたところをキャッチしたり。

とにかく色々試してみた。

立ち回りを考える必要があるが、新たな戦術を生み出せそう。

「凄……本当に戦闘できるんだ……」

「夜な夜な外に出てアラガミと戦っているみたいだしねえ」

ペイラー榊には私の行動はバレていたようだ。

とはいえ私に不利になることではないだろう。

今度からは気付かれないように外に出る必要もないし、楽になるだろう。

「にやあふ」

「なんだろ、もしかして感謝してくれてるのかな？」

「彼は素直だからね、きつとそうさ」

笑うペイラー榊に釣られるように笑うリツカちゃん。

いい子である。

その子をだましているような気がしてならないのは罪悪感もあるが。

とにかく、今日も今日とてお出かけだ。
早く強くならなくては。

その思いが日に日に増していくようだった。

「つよくなりたい？ なりたい？」

「にゃ……？」

背後から誰かの声がする。

振り返ると、そこにはソーマに付き添われたシオがいた。

なんだろう、いつもと雰囲気が違う気がする。

「つよくなる、したい？ それ、クロのしたいこと？ ほんとのこと？」

「……」

そうだ。

そうすればツバサを守ることができるんだ。

そうすれば……あんなこと、二度と起こさないのだから。

「ちがう、ちがうね。クロのしたいこと、きつとつよいがひつようない。だいじょうぶだ

よ」

「——」

それは……そう、なのだろうか。

私だけではよくわからないことだった。

だが、そういう考え方もあるのだと分かった。

私はいつの間にか強くなること自体が目的になっていたのかもしれない。

そういうことだろう。

……そうかもしれない。

私はいつの間にか、強くなることに固執していた。

それはツバサを守るようになるのに必要なのだと思って、ずっと強さを求めていた。

だが、それにこだわる必要はないのだ。

力だけが全てではないと、シオは言っているのである。

「にゃあ……」

そうか。

それはまあ、そうなんだろう。

想いや願いが力となる世界だ。

そういうこともある。

だが、それでも。

力が欲しいのだ。

ツバサを守る為に、守れると確信できるだけの力が、欲しい。

「そっかーほしいかー。むつかしいなー」

「にゃん」

そうだ、むつかしいのだ。

だから放っていてくれてもいいよ。

力を貸してくれるつもりだったのだろうけど。

それはとても偉いことなんだけど。

「そっかー。シオえらかったかー?」

「なあふ」

「そっかー」

だけどこれは私の問題だから。

シオは気にしなくていいよ。

だってシオも、色々大変だろうから。

「そうだなー。シオもたいへんだ。ソーマあそんでくれない」

「……」

無言のソーマ。

私くらい一緒に遊べとは言わないが、そこそこ遊んでやればいいのに。それが保護者としての責任だぞ。

「せきにんだぞー。ちゃんにとれよー」

「何をだ……」

それはもう、好感度とか色々だ。

それから暫くして。

アリサと橘サクヤが失踪した。

指名手配までするとは凄い力の入れようだ。

とはいえ私には何もできないわけだ。

私にできることと言えば、強くなって強くなって強くなることだけだ。

猫だから、可愛くなるのも仕事かもしれないが。

それはそれとして。

ヴァジュラとの正面戦闘は難しい程度には強くなった。

行動パターンを熟知してこれだ。

うっかりしたら喰べられてしまうだろう。

だから焦ってはいけない。

ゆっくりしつかり強くなつていく必要がある。

それと同時に、急がなければならぬという切迫感もある。

そう、シオとの別れがもうすぐだ。

ブラッドウィング2

——少女は、ころころと笑う可愛らしい子供だった。

黒い艶のある黒髪をまとめてポニーテールにしていた。

瞳も黒、やや赤みがかっていた。

そんな少女が出会ったのは、小さくて黒くて弱々しい猫だった。

いや、弱々しいと思っていたのは少女だけだったが。

少女の髪と同じく、艶のある毛並みをした猫。

少女は一目で気に入った。

楽しかった。

一緒にいるだけで世界が輝いていた。

例えお腹が減ったとしても、その子のために自分の食事も差し出した。

嬉しかった。

友達はいた。

確かにいたが、それ以上の存在だった。

家族と言ってもいい。

少女が再び手に入れた、家族だった。
そして、親友だった。

——それを。

奪い去った。

かすめ取った。

傷つけた。

許さない。

許さない許さない許さない。

アラガミを絶対に許さない。

しかし。

それよりも許せないのは。

あの時手を伸ばせなかった自分。

あと一歩踏み出していたら。

あとほんの少しだけ手を伸ばせていたら。

あとちよつとだけ、自分に力があつたら。

きつとあの背中を見送ることなんてなかつたはずなのに。

「……」

少女は黙々と訓練を続けた。

アラガミを倒せる力を手に入れるために。

アラガミ以上の敵を倒せるだけの力を手に入れるために。

少女は無言で訓練を続ける。

その執念、根性はあまりにも異常だった。

そんな少女に声をかけることのできる人間など、いなかった。

「……よくやっているな」

「……誰？」

「む……」

過去形である。

そう、我らがジュリウス・ヴィスコンティが空気を読まずに声をかけたのである。すげえ、半端ねえぜ、やべえ。

そんな声が遠くから聞こえるが、話の中心たる二人の耳には届いていなかった。

「俺の名はジュリウス・ヴィスコンティ。ブラッドの隊長をしている」

「……知ってると思うけど、私はツバサだよ」

「ああ、知っている」

真顔でそう言うジュリウス。

すげえ、あの圧力をもろともしねえ。

少女の圧力は某ロミオも引くほどだった。

「……なんで話しかけたの？」

「おかしいか？」

「おかしくない、けど」

押されてる。

少女が困惑しているのを、周りの人間が驚きの目で見ている。

ナナも驚き、ロミオは口をあんどりと。

そして乗組員の人達も固唾をのんで見守っている。

「確かにお前は特別かもしれない」

「……」

「だが、俺の方が特別だ」

ジュリウス、渾身のギャグ……！

中々ブラッドの面々と打ち解けないツバサのことを危うく思ったジュリウスが、寝ずに考えた渾身のギャグである。

ナナとロミオは全力で噴出している。

「……ふふっ」

そして、その渾身のギャグで、ツバサは笑みを浮かべた。

ほんの小さな笑みだ。

そして、それを見逃すジュリウスではなかった。

「漸く笑ったな」

「……っ」

「その方が可愛いぞ」

い、言った！

素面で言ったよ！

うわー凄いなええ！

ロミオとナナが大はしやぎ。

ツバサも顔が赤い。

「何かあれば俺を頼ると良い。隊長としての責務を果たす時だ」

「……そこまで気負う必要はないと思うよ」

「そうか……？」

「そうだよ」

なんとなく、全体的な雰囲気は穏やかになった気がする。

恐る恐る近づくロミオとナナ。

二人の様子に気付いたツバサは、ため息をつきながら出迎えるのだった。

こうして、ブラッド候補生三人と、隊長がようやく打ち解けることができた。

とはいえ、ツバサが心を開いたわけではない。
それはきつと、もう少し後、友達が増えてからの話になる。

この少女というのは時々我々を捕まえて撫でまわすという話である。

男、ヨハネス・フォン・シックザールは端末をカタカタと動かしていた。

終末捕喰を起こすためだ。

意図的に終末捕喰を起こし、そのタイミングで選んだ人間を宇宙へと避難させることで人類滅亡を防ぐためだ。

そのための鍵となる特異点を確保し、残りは機材の準備だけである。

それさえ終わらせれば……といったところで、ふと横を見ると何故か猫がいた。

小さい猫だ。

黒く艶やかな毛並みをした、少々首輪がごてごてとしている猫だ。

「にゃーん」

そんな猫が、何故かエイジス島の奥の奥にいる。

違和感を感じたヨハネスは、その猫をじっと観察した。

どこをどう見ても猫だ。

しかし、違和感は付きまとう。

このような場所にわざわざ居着くだろうか、猫が。

確かに周囲にアラガミはいない。

しかし餌を与える人間も、手に入る食料もないのだ。

そんな環境で猫が生きていけるだろうか。

更に言うことがあるならば、ヨハネスはこの猫に見覚えがあった。

そう、確かペイラーの飼い始めた猫にそっくりである。

気付いた瞬間、ヨハネスは銃を取り出して猫を撃った。

例え猫であったとしても、ペイラーの飼っている生物だ。

何かあってもおかしくはない。

そして、その考えは正しかった。

なんと猫は銃弾をその身体ではじいたのだ。

やはりただの猫ではなかった。

「———そう、私はアラガミである」

「っ!？」

そしてその直後に、銃弾をはじいた猫が喋り始めたのであった。

ノープランでヨハネス・フォン・シツクザールと話を始めた私です。

ぶつちやけ脳性能でかなり劣っているため、どうしようもなく不利である。

ではあるが、今このタイミングを逃せばシオは月へと飛び立ってしまうだろう。

それを邪魔する存在がいてもおかしくはない。

まあね。

そっちの方がいいと思うんだ。

私はハッピーエンドが好きなので、勇者がお姫様を救ってエンドなんかが好きだ。

なのでここは時間稼ぎをさせてもらう。

「猫のアラガミか……おかしくはないが、喋る猫……というのは些かメルヘンチックだな」

「不思議の国のアリスでも読んだかな」

「吾輩は猫である、なんていう書物もあったな」

「中々勉強しているようだ」

「何、子供と会話するためには、それ用の知識は必要だろうか？」

なるほど、ソーマと話したくて色々勉強していたのか。

しかし、あの事件ですべてはおじやん、ということか。

「まあ私の話は良いだろう。君の話がしたい」

「猫の話ではなく？ いや私は猫なんだが」

「アラガミでもある、と言っただろう？ 喋るアラガミという存在は君と、もう一体しか

見た事がないのでな」

「なるほど」

「正直な話、気になって仕方がない」

とはいえ手を止めることはない。

仕方がないのでぴよんと端末の上に乗る。

ガチャガチャと食べてしまう。

「お話し中によそ見は困る」

「ふむ。話したいということは、私を食べる気はないということか。いや、食べることが

できないのかな? 偏食因子の影響かな」

「まあそれは事実。人間を食べる気にはなれない」

新しく端末を出して弄り出すヨハネス。

流石にそれを食べるのは難しそうだ。

操作を邪魔しつつ話をすることにしよう。

「君は人と人との間に生きていることに疑問を抱いたことはあるかな?」

「ないな」

「ほう。それはどうして?」

「私を拾ってくれた人がいた。それだけだ」

そう。

ツバサがいなかったら私はあの場所でただ動く屍のように生きていただろう。

そうならなかったのは、ツバサのおかげだ。

感謝してもしきれない。

「……君には大切な存在があるのだな」

「そうだ。私にとって大切な、かけがえのない人だ」

「人、か」

「そう人だ。私がこの姿から変わらないのも、それが理由なのかもしれない」

この姿のままであることで、彼女が見つけてもらえるかもしれないという欲がある。

それは恐らく、彼女と会うまではなくならないだろう。

それほどまでに、私に根深く染みついた感情である。

そして聞きたかったことを聞く。

何故息子と喋らないのか。

私ができることではないかもしれないが、聞いてみたいのだから仕方がない。

「貴方は息子との会話を諦めたのか？」

「ふふ……そうだね。あれは私と話すことをやめてしまったよ」

「貴方はどうなんだ？ 話したくないのか？」

「さて、どうだろうね。もしかしたら……妻を失った瞬間に、諦めてしまったのかもしれないね」

「それは……」

「終わった話だよ。少なくとも、私の中ではね」

それは。

なんというか、諦めなのだろうか。

本当にそうか？

諦めてしまったのか。

もしかしたらこの騒動で話せるかもしれないと、期待していたりするのではないだろうか。

そう思うのは、私の勘違いだろうか。

「……勝手に終わらせんな、クソ親父」

そこに、ソーマが単独で乗り込んできた。

他のメンバーはというと、どうやら周囲に潜伏しているようだ。
なるほど、理解。

「来たかソーマ」

「ああ……何考えてんだ、クソ親父」

「人類の存続だよ」

終末捕喰は起きる。

必ず。

しかし、それがいつかはわからない。

ならば、それを今起こしてしまえばいい。

そういう話である。

「故にソーマ。お前は船に乗るのだ。人類を導く英雄になれ」

「おことわり……だ！」

跳躍、そして振り下ろし。

その一撃はシオを縛り付けている機械に向かって放たれて――

「ああ、そうだな。お前はそういう奴だ」

――謎のアラガミによって止められた。

アルダノーヴァだ。

「もはや時間はないぞ。私を倒し終末捕喰を止めてみるか、それとも船に乗るかだ」

そのアルダノーヴァに乗り込み、アラガミと一体化するヨハネス。

不退転の覚悟だ。

問答は無用か。

ならばこちらも奥の手を使う。

鬼車を展開し、壁に這うように組み込まれたコードを引き裂いていく。

私には機械はよく分からない。

よく分からないが、物理的に接触している部分がなくなれば、終末捕喰は起こらないはずだ。

多分だけど。

なので、これは勝負だ。

終末捕喰が起きるか、それとも阻止できるか。

そんな単純な勝負。

そしてその勝負の鍵はソーマに託されたのである。

しかし何ということもなかったから別段恐しいとも思わ
なかった

放たれる剣の一撃。

弾かれる剣。

そして穿たれる一撃。

「ちいー！」

「はあっー！」

激突する2つの影。

それは互いに攻撃を放ちあい、弾けるように距離を開く。

「このクソ親父……！」

剣を振りぬいて叫ぶソーマ。

力を溜めて、振り払う。

その剣の一撃が、もう一方から放たれた攻撃を弾き飛ばす。

「どうしたソーマ。その程度で私を止めるつもりか？」

「くそっ……！」

膝をついて、しかし立ち上がるソーマ。

負けるわけにはいかないのだと、その眼は訴えているかのようだった。

「それに私も応えなければならぬだろうな」

猫ではあるが、私も男だ。

その心意気に敬意を表しする。

というわけでその辺のコードをバリバリと。

これで本当に大丈夫なのかと若干不安になるが、やれることといったらこんなことしかない。

何か研究職に就いていれば端末を使って操作でもなんでもできたのかもしれないが、まあ無理だ。

物理的にどうにかするしかない。

「にやあ……」

しかし疲れる。

何がどこと繋がっていて、何がどうなっているのかが分からない以上、全て破壊するしかない。

故に壁に張り巡らされているコード全てを攻撃して破壊する必要がある。

これか。

違う、止まらない。

これか。

これも違う、止まらない。

それともこれか。

違った、止まらない。

もしかしたら、全てが全て繋がっていて、全てを壊さなければならぬだなんてことになっていたら。

それは私だけでは完遂出来ないだろう。

——故に。

「はあ!」

「せい!」

「こつちも!」

私の他にも、力を貸してくれる人が必要なのだ。

ソーマが戦っている。

しかし、あれはきつと儀式だ。

ソーマとヨハネスの、最後の語らいだろう。

それを邪魔することなんて、私にはできなかった。

恐らくは、他のメンバーもそうだろう。

あれだけソーマが感情を露にしている所なんて見た事がない。

それほどまでに、ヨハネスはソーマの大きな部分を占めるのだ。

ヨハネスはゴッドイーターではない。

その身でアラガミに乗り込んだのだ。

最早人の身に戻ることは叶わないだろう。

それだけの覚悟だ。

それを受け止め、真正面から打倒する。

きつとそんな行為が、ソーマには必要なだろう。

そしてそんな時間も、決着を迎える。

放たれる砲撃をシールドで受け止めたソーマは、そのまま盾を展開したまま前進する。

仕様外の行為だ。

恐らく相当の負担がかかっているだろう。

それでも、ソーマは突き進む。

削れていくシールド。

シールドから外れていて、焼け焦げていく身体。

それでも、ソーマは突き進む。

そして。

ついにソーマはアルダノーヴァを射程内に収めた。

「これで……！」

「……！」

神機を振り上げる。

既にシールドは崩壊し、跡形もない。

身体もかなりの範囲が焼け焦げている。

それでも、ソーマは剣を振り上げた。

「しまいだ……！」

斬撃一閃。

その一撃は、アルダノーヴァのコアを叩き切った。

「はあ……はあ……はあ……はあ……！」

「ソーマー！」

肩で息をするソーマに駆け寄るメンバーたち。

壁の回路もほぼ壊した。

これで終末捕喰が起こつたらもうおしまいだ。

「——だが、私の方が一枚上手だったようだな」

その声は、断ち切られたはずのアルダノーヴァから発せられた。

「なんだと……!」

「物理的な干渉は行いうさ。だが、それだけでは不十分だと判断した」

「つまり……」

「そう、電波、音波、振動で、終末捕喰を始められるように仕組んである」
それは。

最早すべてが間に合わないということなのか。

「……ソーマ。お前は船に乗るのだ」

「……断る」

「世界とともに滅びるといふのか？」

「それもごめん」

「ならば……!」

「俺の道は……俺が決める……!」

壊れた神機を杖にして、ソーマは立つ。

そして、大声をあげて呼びかける。

「シオ! 終末捕喰を止められないのか! 力なら、俺を喰え! そうすればきつと

……!」

悲痛な叫び。

それはきつと本心で。

きつとソーマはシオの為に全てを投げ出す覚悟だったのだろう。

『だめだよ』

しかしそれは。

シオによって止められた。

『だめだよソーマ。ソーマをたべたくない』

泣きそうな声だ。

それでいて、決意の籠った声。

『それにね。シオはね、いいことおもいついたんだ』

ざわりと世界が震える。

終末捕喰の始まりか。

『あそこ。おそらのまあるいおつきさま』

しかし、シオはそんなことを望んでいない。

だから、自分がいなくなつて、自分が全てを受け入れて、全部持つて行くつもりなんだ。

『あそこに、ぜんぶもつていくね』

「そんなのは……！」

『もうきめた』

シオは揺るがない。

いや、揺らいではいけないのだ。

揺らいでしまえば、終末捕喰は始まつてしまう。

そうなつてしまつては、全てが無に帰す。

そんなのは、シオも嫌なのだろう。

「……」
「だけど、それが君の本心だとは思えないね」

そして。

……で。

誰も予想していなかった人物が現れる。

「ペイラー……！」

「やあヨハン。ここは私の出番だと思ってね」

ずっと、ソーマの横を通り過ぎ、シオの前に立つ。

そして語り始める。

「シオ。ソーマはね、君と一緒にいたいんだ」

「……」

「ずっと、ずっと一緒にいて、暮らしていきたいんだよ」

「……う」

「だからね、シオ。独りで行ってしまふのは、やめにしないかい？」

『ううう……！』

揺らぐ、揺らぐ、揺らぐ。

シオの心が揺らぐのと一緒に、世界が揺らいでいく。

どうするつもりだペイラー榊。

本当に妙案があるのか。

それともただの狂言か。

しかし。

ここまで来たら信じるしかない。

私は命をベットしたぞ。

「シオ。大丈夫だよ。一緒に美味しい物を食べて、一緒に楽しいことをして暮らそう」

『う、うううう……！』

聞こえる。

もう世界が歪んで、元に戻らなくなっていく。

だがこれは。

しかしこれは。

何か起こるかもしれない。

そんな予感がしていた。

『シオ……ソーマといっしょがいい！ ひとりはもうやだ！』

泣いた。

シオが泣いた。

そんなことは初めてだった。

そして、これはきつと、シオのとっても純粋な我儘だった。

何かできることはないのか。

ペイラー榼の近くへと降り、声をかける。

「にゃ」

「おっと、君はこっちだよ」

「にや?」

そうしたところで、何故かシオの上に載せられる私。

あれ、なにこれ。

嫌な予感がするんだけど。

「私はね、ある仮説を立てたんだ」

「仮説……?」

「そう、仮説さ」

「もしそれが正解だったなら、私達は助かる。違ったらお陀仏さ」

それは本当に大丈夫なのか?

そして私はこの状況をどうすればいいのだろうか。

わからない。

何も分からないぞ。

「さて。このペイラー榎、一世二代の大博打!」

待つて。

ねえ待つて。

私どうなるの？

爆発したりしないよね？

「世界を救うか滅ぼすか、とくどご覧あれ！」

ポチリと、ボタンが押される。

それはいつの間にかペイラー榼が持っていた遠隔スイッチだった。

「ニヤ……？」

そしてそのスイッチが推された瞬間、首輪から嫌な音が響いた。

ういゝいゝいゝいゝいゝいゝいん。

なにこれ、なにこれ。

知らないんだけどなにこれ。

そして、首輪が展開し、シオと私を包み込んだ瞬間。

「ぎにやあああああああ!!!」

私の全身を、謎の白い光が襲ったのだった……!

ただ彼女の掌に載せられてスーと持ち上げられた

「——まあ簡単に言うと、今回の事件は特異点を使って終末捕喰を起こそうとした、ということに尽きる。

単純明快、それが起これば世界はリセットされる。

そうなればもうおしまいさ。

だけどね。

私は考えたんだ。

終末捕喰を特異点が起こすのならば特異点と特異点をぶつけてしまえばいいんじゃないか。

幸いにも、特異点に近い存在は存在していた。

人間の言語を理解し、人並みの知性を持つ、そんな存在が。

あとは簡単さ。

その存在を、特異点たるシオとぶつける。

そうすれば、終末捕喰同士がぶつかり合い、相殺されるっていう寸法さ。

力の差はあるかもしれない。

だからその力の差を埋めるために少し細工をしたのさ。

え、もしそれが失敗していたら？

なあに、命のひとつやふたつ、研究者なら捨てていて当然だよ。

だからねみんな、相談もなしにぶつつけ本番でぶちかましたのは悪いと思ってるから
ちよつと話し合おうか」

平謝りするペイラー榎。

そしてそんなペイラー榎を囲むメンバーたち。

いやまあうん。

仕方ないとはいえ、これはひどい。

特に私に相談もなしにぶつつ放されてた結果、毛並みが酷い荒れ具合だ。

……まあ、ソーマと抱き合うシオを見れば、それも仕方のないことで終わらせること
ができるのだが。

「ソーマ、ソーマ……！」

泣きながらソーマに抱き着いているシオ。

いや本当に一緒にいたかつたんだなあ。

あの二人組を見ていると、どうしてもツバサを思い出してしまう。

うーん悪い癖だ。

もう少し、気持ちをしつかり持たないといけないかもしれない。

これ以上長居をする理由はない。

私はそそくさと退散することにする。

……ソーマだけは、ここに残るようだ。

父親との最後の会話だ。

邪魔する必要もないだろう。

数日後の話。

「今日はあれから変な影響がないかチェックするよ！」

「え、クロちゃんにそんなことしたんですか？」

「いやだつてあのタイミングじゃそれしかなかったし、ね？」

最近なんだかアリサが遠い。

いや、物理的には近いのだが。

それはともかく。

検査である。

何を検査するのは不明であるが、まあ悪いようにはされないだろう。

……多分。

ちなみにだが、私が喋れることについては内緒にしてある。

だつてそうだろう。

アリサに関しては割とプライベートなことも知ってしまったし、喋ることが可能だと

知られてしまえば、何に使われるか分からない。

メッセンジャー的な扱いに終始する羽目になる可能性もある。

ちよこんと台座に乗せられた私を、ゴッドイーター達がじつと見ている。

いつものメンバーだ。

シオは未だにソーマにべつたりとくつついている。

それ以外はいつも通りだ。

いつも通りが戻ってきた。

「ふむ。やはり数値が上昇しているね」

「なんの数値がですか？」

「アラガミの強度というか、まあそんなところだね。何か変化はあるかい？」

そう聞かれて、最近背中がむずむずすることを思い出した。

なんというか、歯が生えかけていたことの記憶が蘇る。

ぐぬぬぬ、と力を込めて踏ん張っていると、急にポーン、という音が聞こえた。

背中からだ。

ちらりと背中の方を見ると、翼が生えていた。

……おもちゃみたいに小さい奴が。

「かつ……」

「かわいい……！」

そうだね、可愛いね。

私は頭を抱えたいよ……。

なんだろう、マスコット化が進んでいる気がしてならない。

「おー……シオとおそろい、だなー！」

「にゃー」

そう言われてみればその通りで、まるでシオの背中から生えているそれと酷似していた。

それを見てシオが喜んでいるので、まあ悪いことではないかと思いなおす。

はあ……これで空を飛べたらいくらか気持ちは上向くのだが……。

「あ、クロちゃんが飛んだ」

飛べちゃったよ。

暫く私をぼんぼん投げる遊びが流行ったが、アリサの猛抗議によって終了した。

そして更に数日後。

今度は別の支部で問題が発生したらしい。

「ここから北の支部が壊滅したとの報告を受けた」

「北の支部が……」

「人数は把握したものの、発見されていないゴツドイーターが一人いるんだ」

そうして出されたのは一枚の写真。

そこには特徴的な少女の姿が映されていた。

「うう……ひもじいよお……」

同時刻。

その写真の少女は雑草を食べていた。

服装は黒を基調としたゴシックロリータ。

フリフリのレースを大量あしらったその服。

背中からは小さな羽が生えている。

彼女のお気に入りであった。

髪の色はピンクブロンド。

それをツインテールにまとめており、長さは腰に届かない程度。

瞳の色は赤。

両太ももには巨大なガンホルダーがつけてあり、その異様さが際立つ。

とはいえ、それも彼女の的にはアピールポイントだと思っている。

しかし今はそれどころではなく。

「ひもじいよお……おなかへったよお……」

今彼女は神機の制御キットを担いで、歩いているのであった。
雑草を食べながら。

彼女が何故こうして生きているのか。

それは彼女が唯一神機を調整中で、役立たず状態だったからである。

仕方なしに逃がしてもらったようなものだ。

神機の制御キットを持ち運んでいるのはそれが理由の一つである。

もう一つの理由は、神機はこれがないと暴走し、宿主を食べてしまうからである。

いや、正確にはアラガミになるのだが、彼女の持っている情報ではそうなっていた。

神機に食べられちゃうのは嫌だ、ということと巨大な調整キットを担いでここまで歩いてきたのである。

「携帯食もなくなっちゃったあ……はあ、美味しいもの食べたい……」

もさもさと、美味しくもない雑草を箸っていると。

不幸にもアラガミの来襲である。

「うえええーヴァジュラあ……」

相手はヴァジュラである。

彼女があんまり得意ではないアラガミであった。

彼女は遠距離型神機の使い手であるが、エイムが苦手。しかし適合する神機がなかったのもそのまま、というわけである。

彼女はガンホルダーから神機を二丁取り出し、真正面に構えた。

右手の銃はボロボロで、長年使われていたであろうことがわかる。

色は黒く、削れた場所からは銀色の下地が見える。

形状はリボルバーである。

左手の銃は新しく、ピカピカの白い色。

ところどころ黒い模様が施されている。

こちらもリボルバー。

世にも珍しい二丁拳銃の使い手。

それが彼女——墮天使ちゃんことラーフちゃんである。

ぐしゃ。

「あああああああキツがあああああああ！」

なお跳躍したヴァジュラにキツトをペしやんこにされた。

何だかフワフワした感じがあった

「いよっしやー!」

撃つ、撃つ、撃つ。

両手の拳銃で撃ち続ける。

何度も放たれる銃弾の狙いは顔。

ヴァジュラの弱点の一つだが、ラーフちゃん的には当てやすい所がそこしかないという理由で狙っている。

しかし、堪えた様子もなくのしと歩くヴァジュラ。

彼女が放つ銃弾は、威力よりも数を重視しているためだろう。

まあそれだけでなくも戦闘面ではポンコツなラーフちゃん。

そもそも高火力の銃弾を撃つのが苦手なので、ダメージを与える手段が乏しいという話。

というわけで。

「ふええええ……止まらないよおおおお……!」

彼女の攻撃はヴァジュラにあんまりダメージを与えられていないのであった。

「うわああああん……………」

ラーフちゃん、逃走。

彼女の華麗な足（逃げ足的な意味で）を封じていた重い調整キットは大破。

この場にとどまっている必要もないのだ。

そりゃ逃げる。

「踏んだり蹴ったりだよお……………」

ぐびぐびと先程消費したオラクルを回復するために、回復用のボトルを飲む。

とはいえ彼女の口は小さい。

ついでに薬は美味しくない。

なのでぐえぐえと言いながら薬を飲むのだった。

「美味しくないよお……………」

周囲を警戒しながら、ぐえぐえと飲むラーフちゃん。

美味しくない美味しくないと半泣きでオラクルポイントを回復するのだった。

「うう……………追ってきてるう……………」

先程振り切ったはずヴァジュラが、彼女を探して回っていた。

彼女は物陰に隠れているが、見つかるのも時間の問題だ。

「やるしかないよねえ……」

再度銃を構えて、ラーフちゃんは駆け出した。

もつと開いた場所を目指すのだ。

ラーフちゃんに気付いたヴァジュラが彼女を追いかける。

彼女が建物の影に消えたところで、ヴァジュラが急カーブをすると

「さあ行くよお……」

——ラーフちゃんが、左手の銃を構えていた。

彼女の銃は彼女の父親が退役した際に譲り受けたものが右手の物。

左手の物は彼女自身が適合した新しい物だ。

片方が近接系ならば新型になるかもしれない、と言われ悲しい思いもしたことがあった。

それはともかく。

彼女の銃はそれなりに特別である。

右手の銃はオラクルポイントを殆ど消費せず、当てた時に発生するオラクルを吸収できる速射弾を放つ。

逆にそれしか放てないのだが、今は割愛する。

左手の銃はその右手の銃と連動している上に、特殊な機構を備えている。

彼女はそんなに豊かではない胸元についているポケットに手をつ込み、何かを取り出した。

それは銃弾。

それを左手の銃へと差し込んで、がっちりとはめる。

そしてヴァジュラへと狙いを定め――

「必殺、六連火炎弾……！」

――弾丸の中に込められていたオラクルを全て放つのだった。

オラクルリザーブ。

彼女の行った行為はそれである。

戦場で発生した余剰なオラクルポイントを神機にストックして、更に充填できる機能

だ。

しかし、そのためにはブラストというある程度の大きさを持ち、頑丈な砲台でなければならなかった。

しかし、彼女は考えた。

正確には技術者が頭を使ったのだがそれはそれ。

彼女のオラクルリザーブは、砲台の中ではなく、外に充填するのだ。

そのために造られたのが、今彼女が取り出した弾丸である。

その中には彼女が右手の銃でため込んだオラクルポイントと、先程まづいまずいと飲んでいたオラクル回復薬によってため込んだオラクルポイントがため込まれていた。

その量は、本来砲台に込められる六倍。

その凄まじい威力は、目の前まで迫っていたヴァジュラの顔面を砕き、機能を停止に追いやるほどだった。

「……はあああああああ……。」

ヴァジュラを倒した彼女は、その場にべたりと座り込んだ。

無理もない。

ちまちま作り続けていた虎の子の銃弾まで使って倒したのだ。

疲れるに決まっていた。

更によえば、これまで自身の命を保っていた神機の調整キットも破壊されてしまった。

それにより、疲れがどつと現れたのであった。

「ふええええーどうしようううううー……。」

半泣きになりながら、近くに寢床になりそうな場所がないか探す。

幸いにも近くにアラガミの存在はない。

ゆっくりはできないが、仮眠くらいなら取れるだろう。

彼女がこれほどまでに頑張っている理由はただひとつ。

「死にたくないよおー……。」

ただそれに尽きるのだった。

「ふええええええー……。」

ずきんずきんと痛む腕を抱えて、彼女は歩く。

目指すのは南、極東支部がある場所である。

車なんてない。

あるのは自分の足だけである。

調整キットが壊れて一週間。

彼女は次第に自分がおかしくなっていることに気付いていた。

お腹が空く。

お腹が空く。

お腹が空く。

どれだけ雑草を食べてもお腹が空く。

身体は弱っているはずなのに、何故か力だけは強くなっていく。

足は未だに動く。

動かないのは、腕輪がついている右手だけ。

「やだなあ……死にたくないよお……」

半泣きになりながらも、彼女は歩き続ける。

生きるために、死なないために。

そして、父親を馬鹿にしたあいつらを見返すために。

退役した父を待っていたのは、賞賛ではなかった。

弱虫だから生き延びた。

弱かったから生き延びた。

逃げ回ったから生き延びた。

そんな罵倒の数々だった。

それでも父親は決して負けなかった。

それらの罵倒などどうでもいいようにふるまった。

それに耐えられなかったのは、母親の方だったのだ。

その罵倒は、父親だけでなく、母親にも向けられた。

そして、その罵倒に耐え切れなくなった母親は、父親から離れたのだった。

ラーフは悔しかった。

父親は決して弱虫なんかじゃない。

それを証明したかった。

だから彼女は銃を半ば無理矢理譲り受け、ゴッドイーターになったのだ。

しかし。

「その結果がこれだよおー……」

彼女は限界だった。

結局、彼女は逃げて逃げて逃げてここまでできた。

弱虫で、情けなくて、弱くて、最低だ。

このままでは父親の無念を晴らすことなどできはしない。

いやまあ父親は死んでいないのだが、彼女の的にはそんな感じだった。

右腕はもう動かない。

それどころか、なんだか熱を持っている。

これはまずい。

神機に食べられてしまう。

そんなのは嫌だ。

誰か助けて。

死にたくない。

「ふえええええーん……」

彼女が本気で泣き始めたころ。

彼女が小石に躓いてぶつ倒れたころ。

彼女の頭の上に、何かに乗った。

「むぎゅ」

アラガミではない。

それでいて小さい。

小動物だろうか。

こんな場所に？

ぱっと起き上がると、その小さい何かはびよんと飛び降りて、彼女の前に着地した。

それは猫だった。

彼女は猫を知っていた。

それは数少ない母親の記憶。

猫が好きで、ぬいぐるみを作ってくれた記憶。

「猫さん……」

右手を伸ばそうとして、動かないことを思い出した。

そうだ、きつとこれは幻覚なんだ。

彼女はそう思うようになっていた。

こんなところに猫がいるわけがない。

そう思ってた泣きそうになった。

母親のことを思い出してしまったからだ。

今更、なんで。

そんな気持ちになったのだ。

しかし、その幻覚は一向に消えない。

それどころか、どんどん近づいているではないか。

もしかして。

これは幻覚ではないのかもしれない。

そう思って顔を近づけようとした。

その時だった。

「にゃーん……がぶ」

「いっつっつっつっつあああああああい!!!」

猫は、彼女の右手を思い切り噛んだのであった。

掌の上で少し落ちついて少女の顔を見た

私はゴッドイーターがひとり孤立しているという話を聞いて、遠出をしていた。勿論その人物を助ける為である。

最近のアラガミの活動の活性化は、私達の起こした終末捕喰未遂事件が原因かもしれないからだ。

その罪滅ぼしというかなんというか、まあそんな感じだ。

というわけで、今日は北の方へと散策に出る。

ゴッドイーター達と違い、私は偏食因子による体内のオラクル細胞の抑制は必要ない。

というかアラガミである。

喰われるのではなく喰う側である。

こんな猫のような身体だが。

とはいえこの身体も役に立つ。

何せ飛べるようになったからだ。

……いや、ふわふわ浮かぶのが正しいか。

それでも、風に乗ればかなりの速度で進むことができる。

疲れることはないし、快適だ。

……どういう原理で浮いているのか、皆目見当もつかないが。

それはともかく。

向かう先は北。

そして迷子の搜索である。

パタパタと羽を動かして進む私。

どんどんマスコット化が進む現在。

このままでいいのか、という思いが脳裏に駆け巡る。

……が、強くなれるのであれば何でもいいのか。

棚の上に置くことにした。

さて、今日の天気は晴れ。

所によりザイゴート。

あれの生態は不明であるが、そもそもアラガミの生態そのものが分かり切っていない。

しかし、それにしてもザイゴートが多い。

アラガミとして存在している私は感覚でアラガミを探すことができるのだが、そのアラガミレーダーに不思議な存在の反応が見受けられた。

それは、ゴッドイーターのような、アラガミのようなそんな存在。

気になったので、私は即座にそこへと急行することにしたのだった。

「ふえええええーん……」

するとそこには、ガチ泣きする少女の姿があった。

その恰好は報告書に合った通りのもので、どうやら彼女が迷子の子猫、のようである。

あ、転んだ。

これは可哀そうだ。

さっさと起こそうとするが、この身体だ。

気付けにでもなればと頭の上に乗ることにした。

「むぎゅ」

古典的な反応をどうもありがとう。

そんなことを考えていると、ぱつと少女が起き上がる。

「猫さん……」

どうやらこの少女は猫のことを知っているようだ。

まあ、ツバサが知っていたのだから、知っている人間自体はそれほど少なくはないのだろう。

少女は右手を動かそうとしているようだった。

しかし動くことはない。

アラガミとして身体が変化しようとしているためだ。

アラガミになるのは腕輪のついている方だったか。

よく覚えていない。

しかし、この状況で放っておけるほど、私も無感情ではなく。

なんとか人間として助けてあげようと思った。

しかしどうする。

体内のオラクル細胞を抑制する薬品は持ち合わせていない。

アラガミ化を止めるならば、アラガミに変化する前に止めなければならない。

だが、彼女の右腕はほとんどアラガミだ。

この状況下で、どうやって。

そして、ふと思ひ出す。

私は今特異点としての力を持っていて、その特異点たるシオはリンドウのアラガミ化を抑制することができていた。

つまるところ、私にもなんとかできる可能性がある。

「にゃーん……がぶ」

「いっつつつつつつたああああああい!!!」

一か八か。

まさか他人の身体で実験することになるとは思わなかったが、今はこれしかない。

何せ時間がないのだ。

これ以上放置すれば、少女はアラガミになりこの辺りを徘徊することになるだろう。

しかし。

噛みついたはいいものの、ここから先はノープランだ。

シオはアラガミとしてのコアに干渉していた様子だったが、私にはそのような技術はない。

ならば、今持っている知識でどうにかするしかない。

幸いにも、実験体として色々いじくられたらしいこの身体、何かの役に立つだろう

まずはこの少女の身体の状態を調査する。

うむ、浸食率30%といったところか。

大体だが。

アラガミ化した身体を無理矢理はぎ取ったりすれば、確実に後遺症が残るだろう。

それは助けたとは言えない。

一か八かコアに干渉してみるか。

しかし、どの位置にコアがあるか分からない。

そして干渉に成功したとして、どのような命令を下せばいいのか蛾分からない。

ならば体内のオラクル細胞を抑制してみるか。

どうやって抑制すればいいのか。

……ああいや、わかった。

特定の偏食因子をぶちこめばいいのだ。

それが抑制剤として機能するはずだ。

しかし、問題が一つ。

私はその偏食因子を知らない。

いや、知ってはいるのだが、どういう構造なのか、といった辺りのことを知らないのだ。

つまりは知識不足。

詰みか。

……いや、やってみなくては分からない。

ぐるぐる考え、一番命中率の高そうな偏食因子による制御を試すことにした。

体内のオラクル細胞に、人体を喰わないように命令を与えるのだ。

ちゅー……。

「あ、あが、ぐあああああ!!」

偏食因子を注ぎ込んでいると、少女がもだえ苦しむ。

それはそうか。

今の痛みは神機適合時の痛み等に等しい。

しかし耐えて欲しい。

これに耐えてもらわなければ、私としても何のために来たのか分からない。

偏食因子のパターンは、私の身体を巡っているものと同じものである。

私自身が持つ偏食因子が、人間を喰べることを拒否しているからだ。

これが上手くいけば、この少女を救うことができる。

本来であれば実験を繰り返した後で実行したかったが、時間がない。

まさかペイラー榊と同じことをするとは思わなかった。

暫くすると、彼女が大事に握っていた神機が光る。

何と二丁拳銃だ。

珍しい、というか初めて見た。

その神機が、左右で違う光を放っている。

右手の古臭い方は優しい色だ。

水色というか、そんな感じ。

温かく包もうとしている感じがする。

左手の新しい方は苛烈な色。

赤に黄色ととにかく強い光を放っている。

叱咤激励をしているといったところか。

伝わってくるのは、少女に生きていて欲しいという願い。

なるほど、この少女は神機に愛されている。

そして、そんな少女を、私は救わなければならぬ。

光が収まると、少女はこてりと倒れた。

寝息がする。

それも静かなものだ。

どうやら成功したようである。

右腕は少々歪になっているが、この辺は流石にサポートし切れない。

諦めてもらうしかない。

もしかしたらペイラー榊の実験に付き合うことにもなるかもしれない。

それも諦めてもらうしかない。

あとこれ以上何かを拾うのも勘弁してほしい。

猫だぞこっちは。

生き物を拾って育てることなどできないのである。

さて、色々とやらなければいけないことはあるが、まずはこれが問題だ。

……この子をどうやって運ぼうか。

この時妙なものだと思つた感じが今でも残っている

目を覚ます。

どうやら自分は生き延びたようだ。

ラーフちゃんは安堵して、右手で胸を撫でた。

すると、その眼には奇妙なものが映つた。

その右手の手首にあつたはずの腕輪が存在しないのだ。

もしや自分は死んでしまつてここは死後の世界なのか。

そう思つて周囲を見渡すと、半分こになつた腕輪が転がつていた。

風景は猫に噛まれた時のものと同じだった。

「猫さん……い」

そして思い出す。

自分は猫に噛まれたときの痛みで気絶したのだ。

おのれあの猫め、食べてくれる。

そう思つて更に周囲を見渡すと、少し遠くで丸くなつてゐる姿を発見した。

すくつと立ち上がり近寄つてみると、ぐっすりと眠つてゐる様子。

「ふっふっふっ、どう料理してあげようか……」

邪悪な笑みを浮かべて銃を構えるラーフちゃんであったが、ここでふと気付く。腕輪がないのに銃が持てる。

それどころか、気絶する前に感じていた空腹感も、痛みもなかったのだ。

「もしかして」

この子が助けてくれたりしたのかな。

そう思つて手を伸ばすと、猫はぐいーつと背伸びをして起きた。

そして、伸ばした右手を舐めると、ゆっくりと歩き始めた。

暫く歩くとこちらを振り返る。

もしかしてこっちに來いと言っているのだろうか。

「……まあ、他に行く当てもないし」

ついて行こう、そうだった。

いや、当てはあるのだが、向かう先と同じなのできつと大丈夫だ。

彼女は割と悲觀的ではあるが、楽觀視もできるのであった。

しかし、先程までと違い足が軽い。

身体が軽い。

心が軽い。

何かに手助けを受けているようだ。

「なんかゴワゴワしてる気もするけど……まあいつか」

右手には若干の違和感。

しかし命にかかわるものではないだろうと判断した。

さっきの痛みとは全く違うものだったからだ。

暫く歩くと、何やらキャンブ地らしき場所に辿り着いた。

ラーフちゃんを見ると、血相を変えて走り寄ってくる人たち。

自身の姿を見ると、一張羅がボロボロで見える影もない。

若干悲しみを背負っていると、周囲から声がかかる。

大丈夫？

お腹減ってない？

元気？

優しい言葉だ。

久しく聞いていない、他人の言葉。

それを聞いた瞬間、涙腺が崩壊した。

漸く自分は助かったのだと、理解できたからである。

泣き疲れて暫く。

ラーフちゃんもメデイカルチェックを受けていた。

右手の違和感の正体に気付いたのはその時だ。

「……?!」

なんだかアラガミみたいになってる。

いや、アラガミみたいというのはちよつと違う。

具体的に言うとうと装甲らしきものが右手の腕輪があつたところにくつついていたのである。

そしてメデイカルチェックを受けていたラーフちゃんの耳に飛び込んできたのはこの台詞。

「なんで生きてるの?」

であつた。

そしてあれよあれよという間に極東支部の総責任者、ペイラー榊に会うことになつた。

服装はしっかりと作り直した自慢の一張羅。

いつもの格好に、右手だけ肘の上まで伸びた黒い手袋をつけていた。

何か隠すものを用意して欲しい、と言われたからである。

異論はなかったので適当に準備してはめてみたが、思ったよりしつくりきた。

左手は白い手袋にしようかなーとか思っていると、ペイラー榊が現れた。

何やら胡散臭そうなおじさんだ。

一瞬口に出しそうになったが我慢した。

この口の軽さが彼女を苦しめたことを思い出したのだった。

「さて、ここまで来てもらって早速なんだけど、右手を見せてもらえるかな？」

「はい」

軽いノリ。

別に見せるのは恥ずかしくない。

いや、素肌を見せること自体は恥ずかしいが、まあ右腕だけだ。

その程度なら問題はない。

右手の手袋を外し、謎の装甲を見せるとペイラー榊の顔がぎゅいんと近づくと近づく。

いや怖っ！

びくつとして逃げそうになった身体を押しとどめたラーフちゃん。

そうこうしている内に、気付けば謎の機器が右手にとりつけられていた。

あれ、なにこれ状態である。

「あそーれっ」

「え？　ぎゃん!？」

ペイラー榊がぼちりとスイッチを押すと、ラーフちゃんの全身に電気が走った。

ちよつと痛い。

その反応をみて、ペイラー榊はふむふむと言いながら機器を動かしていく。

まるで精密機械だ。

ぼけーつと見ていたラーフちゃんだが、すぐ横をみたらついこの間一緒にいた猫がいるではないか。

こつちに来ないかなーとひよいひよい手招きすると、とことこ寄ってきて頭をこすりつける猫。

か、かわいい。

気付けば猫を抱き抱えていたラーフちゃん。

その恰好のまま検査を進めることになった。

「君、半分アラガミだねえ」

「え？」

検査結果、ラーフちゃん半分アラガミ。

ペイラー榊の見解はそれであった。

「偏食因子によつてこれ以上のオラクル細胞の浸食はないだろうけど、それでもこのオラクル細胞がなくなれば、君の身体はおよそ48.3%欠損してしまうだろう」

「つ、つまり……？」

「君の体の半分が、オラクル細胞になつていているんだ」

つまるところ、ラーフちゃんは人間じゃなくなつたのであった。

「この状況下で生き残れたのは運が良かったね。下手すればただのアラガミになつていただろうからね」

「わ、わあ………笑えないよお………」

淡々と告げるペイラー榊に、引き気味のラーフちゃん。

とはいえ生き残つたのは事実。

彼女はそれ以外に心配がないことを確認し、安堵のため息をついたのだった。

「後はそうだね、その子から離れないようにした方がいいね」

「? この猫ちゃんから?」

「そう。その子が君の命の恩人だろうからね」

そう言うのと、ラーフちゃんから猫を受け取るペイラー榎。

そして機器を操作すると、やっぱりと言いながら猫をラーフちゃんの腕の中へと戻す。

「今ちよつと君からクロを離しただけで、浸食率が0.0013%進んだ。つまりはその子を離すと君はアラガミに更に近づいてしまうということだ」

「え? え?」

「簡単に言うと、そのクロから離れないように生活しなさい、ということだよ」

猫……クロから離れないように生活しななければならない。

猫つてとつても気ままな生き物だった気がするなあ、と思いつつ抱きしめる。

怖い。

流石にああ言われて楽観視していられるほど彼女も能天気ではなかった。

「にゃあ」

「ふえええ……離れないでよお……」

逃げようとするクロをぎゅつと抱きしめるラーフちゃん。
半泣きだ。

いやまあ人間じゃないと言われた上に更に人間から離れてしまうとされたらもうもなるだろう。

「とにかく、なんとか代替案ができるまではその子から離れないようにしてね。大丈夫、クロは頭がいいから」

「そうなんですかあ……？」

「ああ。君が生きていたいと願うのなら、その気持ちを汲んでくれるさ」
じつとラーフちゃんの方を見るクロ。

その瞳は生きていたいかと彼女に語り掛けているようだった。

「死にたくないよお……」

「じゃあ」

泣きながらクロを抱きしめるラーフちゃん。

クロは小さく鳴くと、その身体を委ねた。

まるで仕方がないな、と言っているかのようだった。

ブラッドウィングブラッド3

実地訓練。

ジュリウスはそう言ってナナとツバサを連れてアラガミと実際に戦わせることにした。

両者ともに既に戦えるだけの技術は持っている。

後はきつかけを与えるだけだ。

そう考えたからである。

「見ろ、あれがアラガミだ。俺達の敵、人類の天敵だ」

「……」

ギリギリという歯の鳴る音がする。

その出所は、当然のようにツバサであった。

「隊長、ちよつと」

「なんだ、ナナ隊員」

「はい。ナナ隊員、ちよつと提案があります！」

そう言うと、ナナ隊員はジュリウス隊長の耳を引っ張り耳打ちをする。

「ツバサちゃんか怖いので、早く終わらせたいです！」

「む、それはどういうことだ？」

「気付いてないの!?!」

ナナ驚愕。

それはともかく、暴走直前のツバサを放置して話をするなど言語道断であった。

つまるところ。

『あ、ツバサさんが飛び出しました』

「む?」

「やっぱりー!!!」

独断先行である。

「は……ああああああ!!」

跳躍、そして縦回転。

ドレットパイクの外皮を食い破る。

その際に、砕けた外皮が跳ねて、まるで羽が飛んだように見えた。

「次っ!」

動きを縦から横に。

まだ全身を貫いていなかった神機がドレットパイクの身体をL字に断ち切り、次の獲物へと標的を定めた。

「だああああああああああつー！」

跳躍、そして接敵。

次は神機を突き出しながら飛び掛かり、貫通させた。

その際にドレットパイクの身体を足場にして更に跳躍し、斬り上げる。

着地した瞬間、動きを止める2体のアラガミ。

そこから留まることなく、ツバサは攻撃を続ける。

新しい敵に向かって特攻する。

「……………うわぁー……………」

「中々やるな」

「あの惨状を見てそれ?!」

ジュリウス隊長、豪胆っすね。

それはともかく。

ツバサは次の標的に獲物を定めた。

相手はオウガテイル。

彼女の最も嫌いなアラガミであった。

捕喰形態に移行させた神機を無理矢理振り回し、オウガテイルにたたきつける。

そして、そのままギリギリと全身を鳴らして持ち上げた。

「死つつねええええええ!!」

そして空中に持ち上げて捕喰。

地面へと落ちるのはオウガテイルの欠片だけであった。

「はあ、はあ、はあ……」

肩で息をするツバサ。

今のでスタミナを使い切ってしまった様子。

そこに、新たなオウガテイルが迫ってくる。

「っ!」

「先程までの戦い。見事だったが……ペース配分に難あり、だな」

あわや喰われるといったところで、ジュリウス隊長が割って入り、オウガテイルを斬り伏せた。

綺麗な剣筋に、ツバサは一瞬だけ見惚れるのだった。

「……いや、なんでもない」

「？」

しかしそんなことにジュリウス隊長が気付くわけもなく、そこからは3人で連携してアラガミたちを倒したのだった。

「恰好よかったねーあのブラッドアーツって奴！」

「うん、まあ、ね」

その後、ジュリウス隊長が先に帰投し、残った女子2人がガールズトークをしていた。いやまあ、もっぱら喋っていたのはナナであり、ツバサは相槌を打っていただけだが。

そう、ツバサは考えていた。

ブラッドアーツの事だ。

断じてジュリウス隊長当人の事ではない。

絶対違う。

断固とした意志を感じた。

そう、ブラッドアーツ。

あのような強力な力があれば、きっと私も……。

そう考えたところで、むぎゆつと何かが頭に当たる。
ナナの胸だ。

がっしり抱き着いて離れない。

「ツバサちゃんは……どうしてそんなに頑張るの？」

「……？」

不思議な質問だった。

頑張るといふのはどういうことだろうか。

ツバサ本人は普通にしているつもりだったのだ。

あれで。

「む……どうした？ 何かあったのか？」

どうしようか悩んでいたところで、ジュリウス隊長が空気を読まずに現れた。

どうやら汗を流していたようだ。

水も滴るいい男である。

「……」

ぶんぶんと首を左右に振るツバサ。

どうにも調子が狂うツバサ。

そのままですたと歩いてその場を後にするのであった。

「もうっ！ ジュリウス隊長空気読んで！」
「??？」

第一顔がつるつるしてまるで水晶玉だ

その日から、私と墮天使ちゃんことラーフちゃん共同生活が始まった。

まあ基本的に近くをうろうろしているだけの生活なのだが。

墮天使ちゃんは私から離れることを必要以上に怖がるため、抱き抱えられた状態での生活を余儀なくされた。

おかげで身体が凝って仕方がない。

というわけで抗議の意を込めて、墮天使ちゃんの頭の上に乗ることにした。

こうすることで抱き抱えられることもない。

完璧な作戦である。

「重いよお……」

「にゃあ」

少しは我慢して欲しい。

こちらも羽を伸ばしたいのを我慢しているのだ。

背中のはしまつてあるしな。

とりあえず、この墮天使ちゃんは善良なそれであつた。

ほどほどにいい子であり、悪いことは忌避する。

それに褒めると喜ぶ。

ごろごろするとよく笑う。

必要以上に怖がつているのは、ついこの間死にかけてからだろう。

私が近くにいらなくても浸食がなくなるのならば、きつといつもの彼女に戻るはずだ。

そうでなければ救われない。

……救われる人間が少ない世界であることは知っているが。

それでも、救われる人間が少なくていいわけではないのだ。

……そういえば、後々救われるはずの人間がいた。

そう、雨宮リンドウである。

彼はアラガミ化したものの、シオに出会ってその進行を抑制してもらい、更に彼自身の神機の協力で、アラガミ化を終息させたのだつた。

その状況に至る為にはかなりの綱渡りをする必要があるのだが……。

「ふえええ……どうしてこんなことに……!?」

既にそのフラグは折れた。

というかこの子が折った。

原作でのフラグ、主人公がリンドウの神機を使うタイミングをぶち壊したのだった。

それは数日前の事だった。

アナグラに直接襲撃を受けた時、偶然居合わせたのが私たちだ。

ついでに神薙ユウ。

神薙ユウは神機のメンテナンス中で戦えず、現場に急行したのは墮天使ちゃんと私だった。そして、リツカがアラガミに襲われる直前に、アラガミを撃退したのだった。

つまるどころ。

雨宮リンドウを救うためには私たちが動くしかなかったのである。

「ふええええまつてよクロちやああああああん！」

というわけで、雨宮リンドウがまだ生存していることを示す証拠を探さなくてはならない。

そして、私が動くとなると墮天使ちゃんは突いてくる必要があったりするわけで。

「神機なしで外歩くの怖いよおおおおお！」

追いつくことを優先した結果、神機なしで外を出歩く羽目になる墮天使ちゃんであった。

とことこと歩く私であったが、何も無計画というわけではない。

何せ手に入れるべきは黒い羽やらマントやら。

リンドウから抜け落ちた髪みたいなものである。

さくつと集めてペイラー櫛に渡せばいいのだ。

というわけで、やってきたのは鎮魂の廃寺。

原作で言う寺があるフィールドである。

雨宮リンドウはここでシオの手当てを受けていた記憶がある。

なのでこの辺りに痕跡が残っているのではないかと予想をしたのであった。

とはいえアラガミに見つからないように歩くのは大変。

私単独であれば逃げるのも簡単なのだが、今は墮天使ちゃんと一緒に。

逃げ切るにはある程度の距離が必要となるだろう。

「ふえええええ……どうしてこんなことにいいいい……」

仕方ない。

運命だと諦めて欲しい。

主にこんな時期に極東支部に流れ着いたこと。

「にゃ」

「はえ？」

そうして見つけたのは真っ黒い羽だ。

黒いオーラっぽいものを漂わせるそれは、何だか危険な雰囲気醸し出していた。

まあそんなことは今はどうでもよく。

口にくわえて脱出だ。

急がないとアラガミが来る。

「え、もしかしてそれ見つけるだめだけに来たの!？」

「にや」

「ふえええ……だつたら言ってくれば取りに来たのにいいいい!」

喋りたくないのだから仕方がない。

みんなのプライベートを守るために。

「結論から言おう。リンドウ君は生きている」

3日後、重大発表として報じられたのはそれである。

どうやらペイラー榊は謎の羽を解析しただけで、雨宮リンドウが生きていることが分かっってしまうほどの天才だったらしい。

適当に渡しただけの私とはえらい違いだ。

「この辺りはクロ君の功績だね。リンドウ君の痕跡である羽を見つけてくれたことと、そこにいるラーフ君が鍵だったよ」

「はえ？」

そう言いながらモニターを開いて説明を始めるペイラー榊。

簡単に言うと、雨宮リンドウが死んでいる、もしくはアラガミ化しているとされていたが、それを覆したのが私の持ってきた羽と、アラガミ化しかけている墮天使ちゃんの解析結果であつたらしい。

墮天使ちゃんを救つたらしい私の行動が、どうやら雨宮リンドウが生きていることにつながつたというので、正直ありがたいところ。

もしそうでなかったら、雨宮リンドウがこのままフェードアウトしてしまうところだつた。

「とにもかくにも、みんなにはリンドウ君を探してもらうことになる。心情的にも、戦力的にも、彼は必要だからね」

という感じで、みんなは仲間が生きることややる気が急上昇である。

そんな中、よくわかってない墮天使ちゃんは置いてけぼり。

みんなの元気そうな顔を見てきよろきよろしている。

「私が役に立ったんなら、まあいっつか……」

そう言つて笑う墮天使ちゃん。

天使か……。

これからは墮天使ちゃんも前線に出るわけだが、そこに私も同行することになった。

ゴッドイーターは複数人での行動がほぼ義務付けられているが、それは行方不明者を出さないための手段である。

それと同時に人数制限があるのは、その上でオペレーターが管理できる限界がその数であるからだ。

まあこの辺はベテランオペレーターならなんとかなりそうなので、きっと別の問題もあるのだろう。

聞いた話なので勘弁をしてほしい。

さて、何故そんな話をしたかというのだ。

私は今、墮天使ちゃんと離れることができない。

というか墮天使ちゃんが離そうとしないので無理。

なので私と墮天使ちゃんを一緒に編成しなければならぬのだが……。

よくよく考えると、私はゴツドイーターとして登録されてないのでは？

ということだ。

ゴツドイーター4人と猫の5人編成で任務に赴くわけである。

メンバーは私、墮天使ちゃん、神薙ユウ、アリサ、そして橘サクヤである。

凄いで神薙ユウ、ハーレムだぞ。

だから何故か私を取り合ってる女子メンバーを宥めておくれ。